

逗子市文化財調査報告書

第十五集

小坪の漁労具

逗子市教育委員会

逗子市文化財調査報告書

第十五集

小坪の漁労具

逗子市教育委員会

刊 行 に あ た っ て

このたび逗子市文化財調査報告書第十五集を発刊するのはこびになりました。

今回は逗子市で唯一の漁港である小坪の漁労具を調査対象にし、平成3年度に調査を実施、今年度その調査結果を取りまとめて報告するものです。

小坪は鎌倉時代から栄えた漁港ですが、時代の移り変わりとともにその漁法も変わり、昔使われていた漁労具も数少なくなってきました。

このことから教育委員会としては早急に漁労具の調査の必要があると考え、専門家にその調査をお願いいたしました。調査は平成3年9月から4年3月までの間、小坪漁港を中心として現物の写真・図面・寸法などをとる調査や、古老から昔の漁の様子や道具の使い方などの聞き取り調査を行い、貴重な資料を得ることができました。

漁労具は漁介類を捕獲するための道具で、海という厳しい自然を相手にするものであり、それに対応していくための地域独自の工夫や改良が加えられてきましたが、時代を経るにしたがって漁場の拡大や漁法の変化に伴い、昔ながらの漁労具は急速に姿を消しています。

この報告書が昔からの漁民の生活や歴史を勉強するうえで、少しでもお役に立てればと考えております。

おわりに、調査及び執筆を賜りました関係各位に深く感謝を申し上げます。

平成5年3月

逗子市教育委員会



現在の小坪



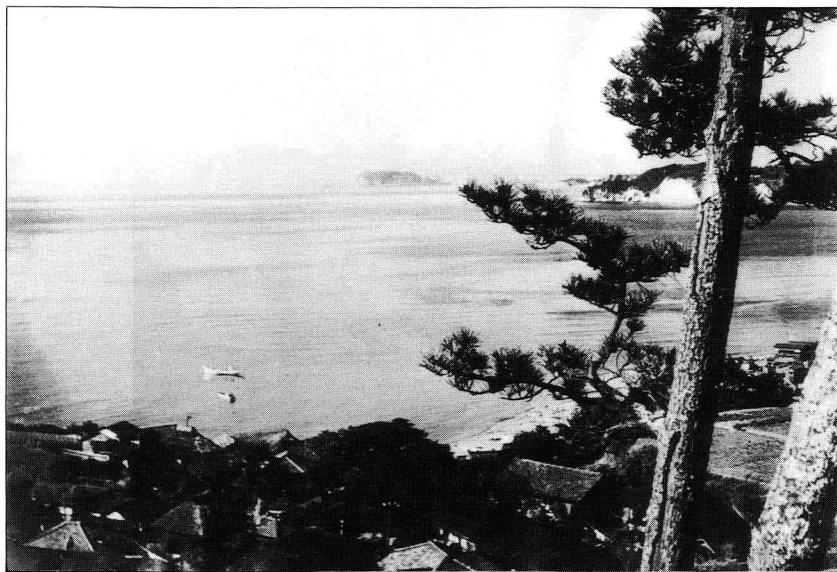
小坪漁港遠景



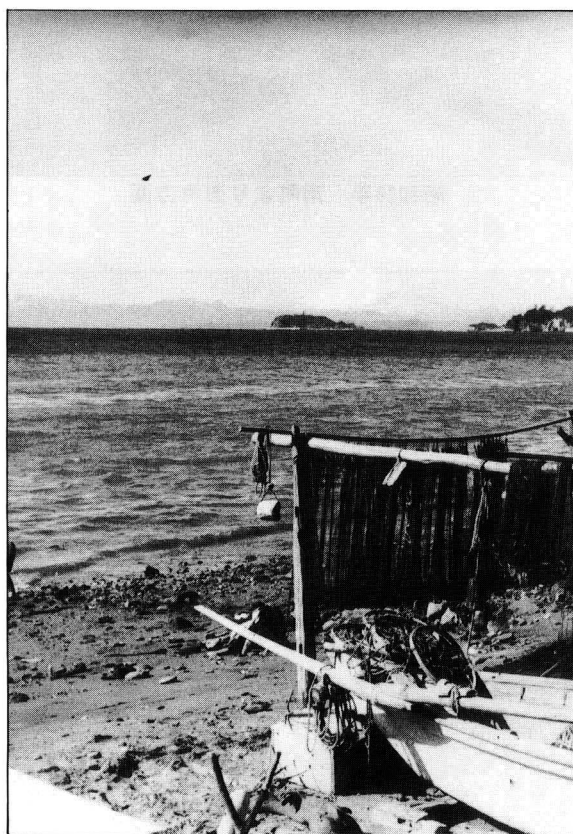
小坪西町の神明社



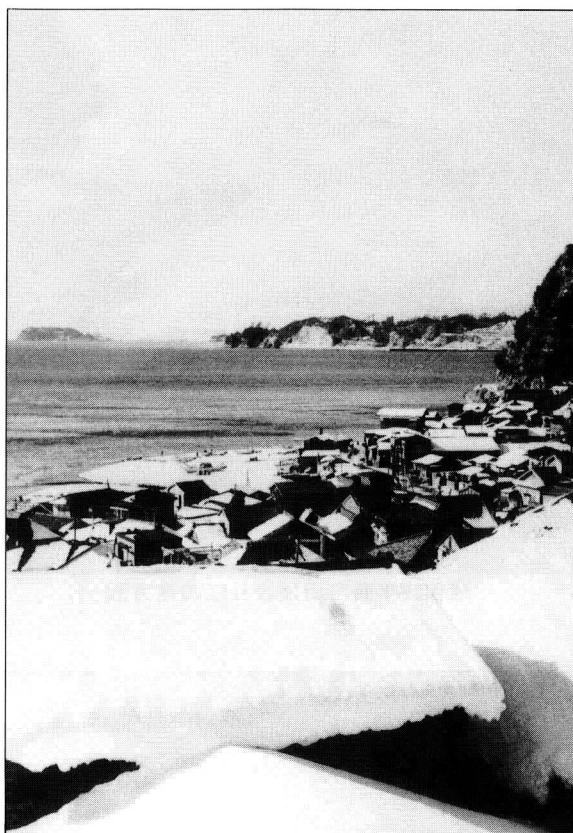
マ イワイ 万 祝 (北村浅子氏寄贈)
文政の頃より今に伝わる小坪万祝着
海の大漁を祝して配られた豪華な男の晴れ衣裳



昭和28年西町山頂より江の島方面



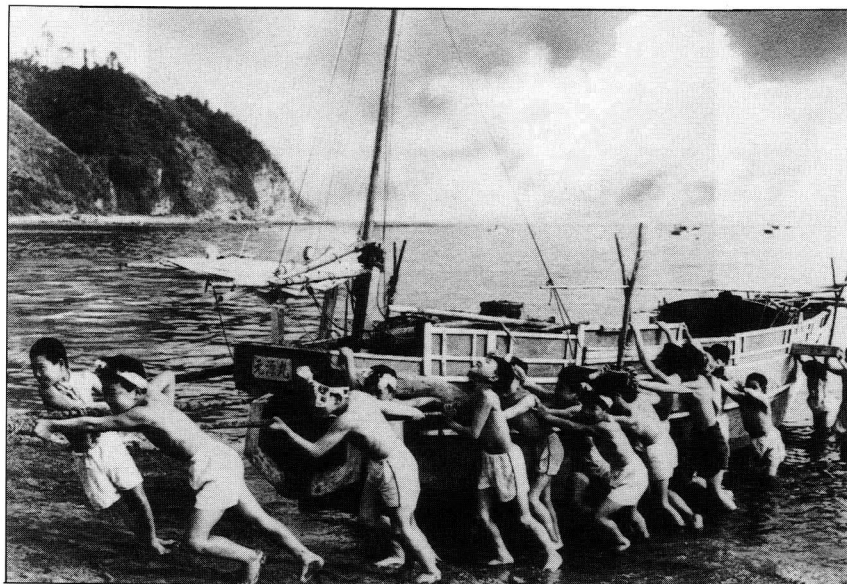
昭和28年 南浜より江の島方面



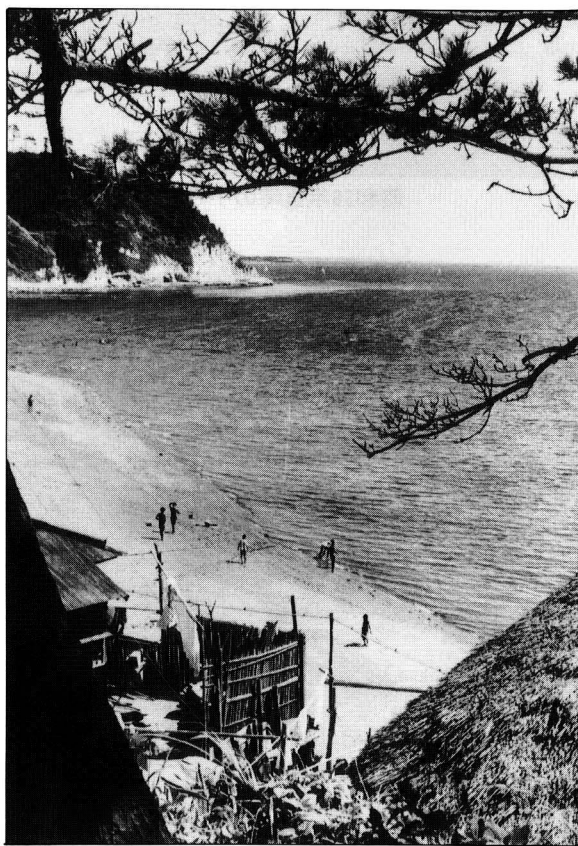
昭和28年 南町より西町方面



昭和28年 住吉城址より伊勢町、南町、大崎方面



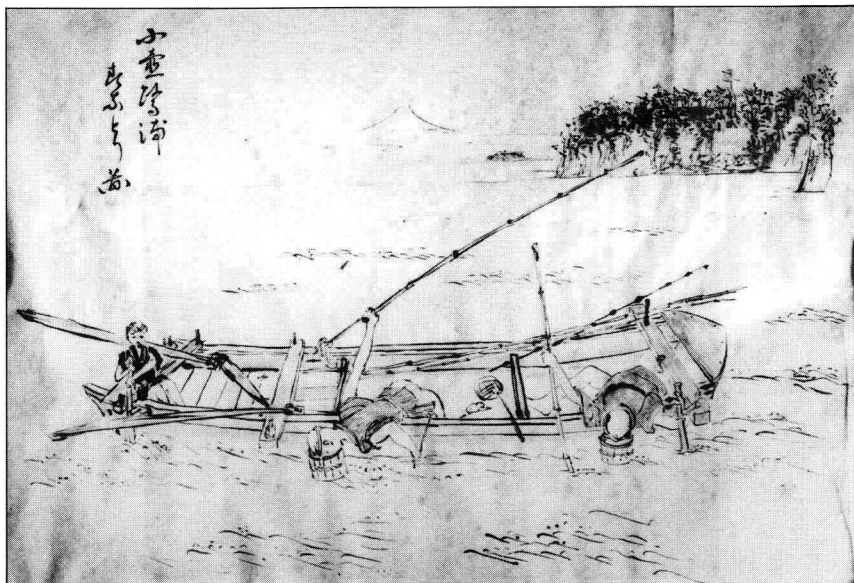
昭和30年 中里海岸
小坪小学校児童によるカグラサンを使った船の浜上げ



昭和31年 西町より大崎を望む



昭和38年当時の小坪



小坪鷺浦でのボウチョウ漁の図



和船（第2木ノ浅丸）



船を移動しやすいようシュラに油を塗る

目 次

はじめに	1
I 小坪の漁労集落としての歴史	3
1 小坪の漁労集落のおこり	4
2 明治・大正期の小坪の漁労生活	7
3 大正・昭和期の小坪の漁労と民俗	7
4 現在（平成4年）の小坪の漁師の現状	9
5 おわりに	9
II 漁労具調査内容	11
1 調査の状況とその結果	12
2 漁労具の種類（図版）	14
I 網 漁 具	14
II 釣 漁 具	19
III 見 突 漁（ぼうちょう）	28
IV 特 殊 漁	32
V そ の 他（各漁に付属するもの）	35
VI 船大工道具	44
VII 実 測 図	52
3 古老に聞く	60
III 三浦半島の漁労史（附編）	65
1 はじめに	67
2 釣針	67
3 網錘	69
4 回転鉈頭	71
5 アワビオコシ	72
6 まとめ	72
IV 参考資料	81
1 小坪漁業統計資料	82
2 小坪漁業協同組合資料	84

は　じ　め　に

逗子市教育委員会の要請にもとづき、年々少なくなりつつある漁労具を調査・記録することになった。

本事業は、平成３年度に調査を行い、平成４年度にその調査結果を取りまとめるという２か年継続の事業であったが、まず調査にあたり、塚田明治氏を副団長とする横須賀考古学会の会員の方々と調査団を編成した。

調査団は、小坪に残っている漁労具の数や保管場所の確認を行うと共に古くから漁師をしていた人を捜して準備を進めた。調査は、小坪漁港・小坪小学校資料室・小坪公民館展示室・小坪会館などにある漁労具や昔の写真・絵などを一つ一つ写真に記録することや寸法をとって、図面の作製を行った。又、古くから船を造っていた人の話や地元の古老から漁の様子、いろいろな道具の使い方の教示を受けて調査を続けた。

漁労具は永い間潮風にさらされていたり、海で使われていたため、原形をとどめていないものが多く、形が残っていても補修をしないと保存・展示ができない物もあった。又、金属で出来ている物も腐食が相当に進んでいるものが多く、今後、保存のための処理については何らかの方策を講ずる必要があろう。

この報告は多くの方々に理解していただけるように、できるだけ写真や図を挿入してわかりやすいように努めたつもりである。

終わりに、この調査を進めるにあたり、ご協力、ご教示をいただいた地元の皆さんや関係各位に深く感謝を申し上げます。

平成５年３月

逗子市漁労具調査団

団長 石井清司

I 小坪の漁労集落としての歴史

1 小坪の漁労集落のおこり

小坪の歴史は吾妻鏡巻二、寿永元年（1182）六月小一日庚子の記録によりはじめて知ることができる。

武衛（頼朝）、御寵愛の妾女（亀前と号す）をもって中原小中太光家が小窪の宅に招請したまう。御中通ひの際、外聞の憚りあるによって居を遠境に構えらると云々。

寿永元年十一月小十日丑

この間御寵女亀前、伏見冠者広綱が飯島の家に住する（小坪より移り住む）なり。しかるにこのこと露見して御台所殊に慣らしめたまふ。これ北條殿の室家の牧の御方、密々にこれを申さしめたまふが故なり、よって今日牧野三郎宗親に仰せ広綱が宅を破却しすこぶる恥辱に及ぶ、広綱かの女相伴いたてまつり、希有にして遁れ出で大多和五郎義久が燈摺の宅に到ると云々。

寿永元年十二月十日丙午

御寵愛女小中太光家が小坪の宅に遷り住む（燈摺より帰る）、しきりに御台所の御気色を恐れ申さるといへども御寵愛日を追いて興盛の間、なまじひにもって仰せに順ふと云々。

ここではじめて小坪という文字が出てくる小窪と小坪は音が同じようなので変化したのだろう。以来、小坪という文字で書かれている。そのほか寿永より建久の数年間頼朝はしばしば小坪に遊び※院飯の儀や、笠懸の練武を行っている。そのほか文書に出る文字は「小壺」「小局」という文字が出るが、小坪の文字が一番多く出るようになります。小坪の浜での行事に事借りて実は愛妾亀前に逢うことを楽しんだのではないかとされている。

鎌倉は三方を山に囲まれ南は海という地形は、鎌倉城とも言われて容易に入り込めなかった。僧往阿弥陀の進言を直ちにうけ入れた泰時は、伊豆（根府川）より臥石を運ばせ、和賀江の磯の上に投石し港の基礎を作り、その上に土を盛り、岸壁を作った。我が国はじめての築港である。これによって日本全国から物資や人々が容易に鎌倉に入れるようになった。この港は、極楽寺の忍性が管理したようである。現在は小坪の埋立てによって海流が変わり、礎石がくずれて大変形を変えてしまったが、干潮時にはまだその跡を見ることができる。港の歴史は長く江戸時代まで、この港を使っていたようである。使用の権利をめぐる小坪と坂の下・材木座の紛争がたびたびあったことが古文書に記されている（鎌倉近世史）。

1232年の和賀江港の開港によって小坪の漁労集落の曙がはじまる。首都鎌倉の海とその周辺の磯に目をつけたのが伊勢の商人であった。即ち海人の国志摩の漁師をさそって和賀江のすぐ隣の小坪に移住させて鎌倉に魚介を送りこむ計画を立てた。すばらしい磯と志摩の海人の優秀な技術とがたちまち鎌倉の魚座を賑わし、鎌倉の重要な蛋白源となったのである。

※院飯とは武將が將軍を招待して御馳走することで、一定の資格のある武將で誰でもできることではなかった。

1264年に幕府は商家の整理を行った。材木座、大町、小町と和賀江港から都心に向かって商家を並べこまかい立地条件の規制をしている。いわゆる鎌倉七座といわれる。魚、米、器、塩、刀、衣、

葉が軒をつらね庶民の盛り場ができて賑わった。そして小坪は従来考えていたよりもっと早く1250年頃小町に魚座ができていた。この頃の小坪は六十戸あまりの漁村となっていたようである。そして1300年頃には百軒近い集落ができていたと考えられる。

首都鎌倉を相手に魚座まで作ったその資源の基は小坪の海士集落であったのである。

突然百戸もの集落が降って湧いたようにできるはずはない。まして専門的な技術が必要な漁師の仕事である。何回かにわたって西から移動してきたと思われる。そこで小坪の漁労民は、どこから移住したのかそのルーツをさぐってみることにした。勿論仮説ではあるが、材木座の伊勢屋（2、3年前に後継者がなく閉店した）、小坪の山田屋商店、地名の伊勢町、西町の神明社、伊勢大神宮、等々伊勢、志摩、に関係のある地名が多く、海神として祀られる八幡宮、亀大神、竜宮社、これらは志摩の漁村のどこにでも見られる神々であることを知って、志摩に小坪のルーツを求めその風俗を訪ねてみた。小坪と同じように観光地として急速な発展をした鳥羽におり立ったがその変りようは、小坪の観光漁村と化した現在と同じであった。志摩のハシリガネで有名な渡鹿野あたりは特にひどい俗化でむかしの面影はなかった。そこで海女で知られる英虞湾をつくる最南端の前島半島の外海に石鏡、国崎、相差、酌矢、大王崎、船越、布施田、片田、和具、御座まで浦々を訪ねて歩いた。町も人も近代化された中で古老からむかしを聞き出すのにはたいへん苦勞をした。

志摩が小坪の民俗の発祥地であると確信を得たのは石鏡、国崎、相差の海辺を歩いた時であった。石鏡の海女小屋では姿こそ近代的でウェットスーツに水中眼鏡という、いでたちであったが男言葉で磯を語り、磯は海女のものだという磯に対する海女の執念があった。そして彼等の出かせぎは東への移動であった。伊豆、稲取、川奈、真鶴、鎌倉、三浦、房総、と現在でもその潜水漁労は色濃く残っている（拙著鷺浦考に詳細）。

そして首都鎌倉に隣接した小坪は当然、西国の漁業の前進基地となったはずで、古記録から見ても鎌倉を支える大漁場であった。小坪は西南に向けて口を開けた集落で漁港としては前述の漁村のように四季の風向を考えた立地条件は無く、むしろ悪条件を持った漁港であった。そんな地に何故港ができたのだろうか、すぐ隣りの和賀江港は江戸期まで漁港として使われていた。西風の強い日は小坪の船も寄港したらしく材木座の漁師とトラブルを起こした記録も残っている（鎌倉近世資料・材木座）。和賀江は長く極楽寺の管理下にあったこともその記録に残っている。前述の根府川石の基礎の上に土を置いて岸壁を造ったようでたびたび波に崩されて修理をしている。

極楽寺の忍性は庶民の救済事業に力を入れ医療施設や厚生施設を多く造った。

小坪は鎌倉の南境として、幕府のベッドタウンとしてその名を知られ、今も頼朝の愛妾亀の前の住んだ地として語られる。せまい鎌倉からわずかに離れて、身をかくすには、かっこうの村であったようだ。

鎌倉を守る神と言えば鶴岡八幡宮で、鎌倉を象徴する守護神であった。海の献上物は伊勢大神の御贄所の志摩と同じであった。献上の海産物はアワビ、サザエ、が主で稲村から小坪にかけての磯はそれらの生息に適していたようだ。後年の飾海老（伊勢エビ、鎌倉エビ）やミルも神事用として大切な海産物であった。特にミルの献上が今日に至るも残っていて、毎年11月の神嘗祭には小坪の

漁協から代表が宮中に参^{さんだい}内して献上している。

ミルという海藻は海松と書いて海^み松と読んでいる。宮中で儀式のあった時神前に供えるもので今もそのしきたりは伝承されている。この海藻についての話は今昔物語巻第30に書かれている（拙著潮^{うしほ}かぜ33頁に詳細）。そんなわけでこの宮中献上はいまだに行われているのは大変珍らしく、小坪の人もあまり知らない行事で長く残したいものである。

さて小坪と幕府との関係は前述の吾妻鏡の一件のほかに武将の何人かの住居があった。それは大崎中腹に残る五輪塔でもわかる。この五輪塔10数基は鎌倉石でその磨滅もはげしく、当時は地元の鎌倉の石を使ったものであろう。勿論、年号もわからない。土地の人に聞けば、ここに1畝か2畝の平地があってそこに五輪があった（西向きに）がその五輪をかたづけて一列に並べ（現在は北向き）その平地は畑になっていた。

小さな面積を猫のひたいほど、というが、そんな畑が披露山から大崎山に、小坪の集落の戸数だけあったようである。つまり小坪は半農半漁の集落で頼朝の開幕以来、鎌倉の台所の海産物を一手にあずかっていたのである。そんなわけで鎌倉の一漁村小坪の存在価値は高かったのである。漁村と言えば漁師、古くは海人で潜^{かづ}く人。でその長い漁労生活の中では、知識も乏しく、彼等をいつもリードしてきたのはその古郷志摩、羽鳥^{はとり}あたりの商人であったと考えられる。近世でも岡名主^{おかみ}とか、浜名主^{はまな}とか言われて漁師のめんどろをみたり、渉外の世話人となったのはその昔、漁師をつれて移住した、伊勢の商人にほかならない。今に言いつたえる、12代目、伊勢の山田屋とか、紀州出の新（進）左エ門とかの声を聞いたものである。忘れられないように記しておく、このように長い間鎌倉との接触は歴史的にも経済的にも密接な関係を持って今日に至っている。具体的に言えば小坪を通っている名越古道、中世の披露山道、近世の西切道、これ等の馬つぎ場などもあり近くは大正期の電燈の導入、水道の施設、西谷戸トンネル、開通等によりすべて文化は鎌倉より入っている。鎌倉の市制の時も小坪にさそいがあったと聞いている。交通機関のバスも昭和10年頃から鎌倉より逗子に入るようになったり地勢的にも東谷戸^{きりどおし}の切道ができるまで（昭和3年）は鎌倉との往来のほうが多かったのである。

さて話をまた昔にもどして、鎌倉時代の漁村小坪の不思議について書いてみたい。当時鎌倉都内の人口を知るのに鎌倉の政策で禁酒令を出したことがある。都内の家から押収した酒どっくりの数から推^おして約2万戸と考える。この戸数から人口は10万にもなろうか。優れた磯を持っている小坪でも魚介類は取りつくして、何れかの対策を立てる必要にせまられた。志摩の漁師の考えでは残念ながら及ばぬことである。そこで幕府の識者か伊勢の商人かの手によって鎌倉の蛋白源を守るために出漁の制限をしたり、漁獲の方法を制限したりしたと思われる。志摩独特の優れた技術を持つ潜^{かづ}女たちの伝統ある生活はそう簡単に変えることはできない。恐らく法令によって漁獲の方法を従来の潜水法から船上^{かみづ}からのモリやオコシによる魚介の捕獲に転じて行ったのだろう。そして今の小坪独得のほうちょうと言われる漁労操作ができあがり今日に及んでいる。フシ（もりのこと）やオコシ（アワビオコシ）も水深によって作業しやすいように竹や桎を使ってその浮力のちがいで水中で使いわけている。また、顔に合わせた覆面式水中メガネの発明によっていっそう海底が見やすくな

った。このように海女の潜水漁法から海士の船上作業に変わって男子の地位が上がり海女の仕事は男子に追従した援助型になった。このように漁労の形態を変えて海を守りぬいた漁師が住んでいた小坪は鎌倉では大切な漁村であり、隣接地としての大切な漁場であった。

その相互依存の歴史は鎌倉幕府の開幕以来近世までその生活を共にしてきたと言ってもよい。したがって鎌倉依存の小坪は、鎌倉の盛衰と共にまた小坪の盛衰があったのである。

2 明治・大正期の小坪の漁労生活

明治期になると小坪の漁労にも維新が起こった。それは各地に機械船の導入と、大規模な網漁がはじまったり、新しい漁場ができたりして生産も増した。獲れる量は多くなったがその販路を失ったため遠方まで売りに出るようになった。小坪は元来漁師で生活をたてたのだが近隣の町村が発展すると遠く町や村に売りに出かけるようになった。三ヶ所ばかりのイサバ（集積所）と言われる場所に魚を集めて、ポテー（魚商）が買いとり担いで売りに出かけた。天秤でかつぎ、手を振って調子を取って歩くので棒手振り、つまりポテフリ又はポテーと言われた魚売りで大正期は岡に上がった漁師は約百人を数えた。ポテーは魚のイサバ（集積所）から適当に買い取り、早朝に出発して遠く東は横浜日野、峯、田浦、船越まで、西は平塚、須賀、伊勢原、平塚までてんびんで売りに出た。夏などは早朝出発して民家が目ざめ、雨戸を開けるのを待って売り声をかけた。夏は前日から何回も水を変えて鮮度を保つために夜明け前の二時から三時には出発しなければならなかった。そのための女房の水汲みも大変な労働であった。漁師の女房は夫が船出したあとは、畑の仕事があった。猫のひたいのような小さな畑でも、農作業となれば大変な労働であった。すぐ隣の鎌倉はさびれてわずかに大山まいりの帰りのコース江の島、鎌倉めぐりの観光客相手のみやげ売りで細々とくらし、武家屋敷は移住し庶民の生活が相手の魚商たちは遠く地方の農家まで売りに出なければならなかった。

生産をあげればよいという漁師の考えは、養子という（もらいっ子）まさに人海作戦も失敗し、かえってそのための人口の増は人間の口を多くしただけであった大正初期の町役場の記録によれば、小坪視察報告の中に、その貧しさは目を覆うものありと書かれている。昭和3～5年の不景気が全国的に襲った時も同様で、昭和4年には県の経済厚生指定村となり貯蓄の奨励や学校で子どもの一銭貯金や、文具の支給や給食があった。給食といっても現代のような立派な給食ではない。児童の体力の低下を恐れて、かん詰めの雑炊や、豆腐の味噌汁など時々あった。マッチ箱に一ぱいの米を持参した記憶もある。

3 大正・昭和期の小坪の漁労と民俗

この頃の話になると大正8年生まれの小生は自身の目や耳で体得した事柄になるのでその事実を記述することができる。

さて前ページに続いて小坪・漁労民について更に記述してみよう。前述のように潜らなくなった小坪の漁師たちを指導し、磯の保護や乱獲をいまして息の長い水産を考えた指導者がいたはずである。資料を持たない今では誰も想像がつかないが、江戸期、明治にかけての網元や船頭の中に進んだ考えを持った人物がいたにちがいない。漁師に言わせると、小坪の、あわび、さぎえ、とこぶしに関してはむかしも、いまま変わらないという。

磯を相手のほうちょう漁師が減ってきたための自然繁殖ということもあろうが、近ごろは、小田原の水産研究所で時々稚魚を放流していることもその成果をあげているのだろう。ほうちょう漁の漁師はその漁獲を上げるため、網の使用を考えた。元来、潜水漁法からほうちょうと言われる漁法になった。かがみという顔にかぶる（のぞきめがね）を用いる漁法に変わった。網は使わなかったが昭和初期からは小さい網を使用するようになった。一人か二人で乗る船だから、その網の大きさにも限度があった。一番よく使われた網について述べることにする。

マス網—大きさが八～十間くらいの四角い升状の網なので一升ますの升からきた名であろう。深さは四間くらいで蚊帳をさかさにしたような網である。口を開けた一方から入った魚を底をしめ上げてすくい上げる網で4・5月ごろ、産卵に来るアオリイカを主として捕獲する網なのでアオリ網などという。そのほか、カマス、メバルなどの雑魚も入ることがある。

エビ網—磯の棚にかくれているイセエビは夜間活動するので磯の入口に垂れ下げておくとその網にヒゲを突っこみ、動けなくなるもので網ごと船に上げてから、はずすことになる。小坪のほうちょうの一番の収穫である。近ごろはあまり取れなくなったが、昭和初期はボテーがエビを生かしておくために砂浜で砂をかませる時に目がとどかず、にげられるほどとれたものであった。自転車の荷台につけた箱の中からつのをたくさん出して走って行く魚商のうしろ姿を思い出す。

そのほか、タタキ網といわれる網も使ったがこれはあまり普及しなかった。岸近くに網をはって竹竿で水面をたたき網に魚を追いかむものでスズキ、タナゴ、セイゴなどをとったものである。また網目の細かい、コノシロ網もあり、またイナダ網も少数の人だが、使っていた。

潮を見、風を見、永年の漁師の感と、経験によって漁をしていた。冬、潮がよいと（下がよく見える時）東京湾を横断して房総まで、その腕を買われて出かせぎに出かけたものだった。したがって房総と小坪の関係は深く、婚姻関係をむすんで両地に新しい戸籍が出来ている。小坪には房州屋とか銚子という屋号がたくさんあることでも房総との往来がよくわかる。

「漁師になるには学問はいらない」というのが漁師の考えで明治7年に開校した小坪学校も就学率は低く、それよりも早く船に乗せようとした。

しかし文部省令による義務教育への目ざめは漁師の考えも変えてくるようになり有志のすすめによって児童数も増加してきた。明治20年には香蔵寺に収容しきれなくなり、報身院を分教場とした（現小坪寺である）。ここで10年も学び現在の大屋敷に移転したのが明治31年であった。この頃高等科は小坪になかったので逗子小学校か鎌倉附属小学校に行かなければならなかった。この頃高等科に学んだ人はもう物故していない。長年教育の場であった報身院、香蔵寺は明治40年末焼失。明治42年に両寺を合併して小坪寺と改称する。

漁師と学校教育についてふれてみたが、これは手帳の会発行の年表を参考にしたものである。ともあれ大正3年の小坪トンネル開通によって鎌倉と小坪に新風が吹きこむことになった。この頃小坪の戸数320、人口2029、魚商100人、漁業をあきらめて転業し、いわゆる岡つとめか、棒手ふりが多くなった。岡つとめとは、田浦の海軍工廠^{しょう}につとめ給料取りになった人々である。

4 現在（平成4年）の小坪の漁師の現状

昭和40年から小坪海岸の埋立てがはじまった。通称西の磯として親しまれたものでその先にある小カブネまでを埋める計画である。磯の生物（魚介類）を豊富に持ったこの磯を埋め、宅地にするという計画には反対もあったし、風景も破壊され、砂浜もなくなり、残念なことになったが海で生きる小坪の漁師にとって、むかしから悲願としていたのは港を造ることだった。

風が吹く度に船をあげ、台風の来襲の時は小坪中が総出で細い路地まで船を上げなければならぬ。真夜中に悲鳴に似た船を上げる声を毎年何度か聞かされてきた。その願いがかなうならば、と漁師は埋立てに賛成したのであった。

埋立てがはじまった。だが台風が一過すれば、たちまち岸壁も土も破壊され大損害になることはまちがい無しと思って見ていたが、何と昭和40年から、53年まで、不思議に台風は皆無であった。ついていたのは埋立業者で難無く完成したのであった。埋立開始の昭和40年から実に13年間台風が上陸しなかったことは異常気象とも思われる近世の小坪のできごとである。埋立開始の当初は分譲住宅を造るということであったが、いつの間にか高層ビルが立ち並びリゾートマンションになってしまった。有名な文豪川端康成の自殺も江の島に面した4号棟、4号室という部屋で世間を驚かせた。

南国を思わせる椰子の並木とイタリア風建築はモーターボートの港を前に置いて派手な街並になってしまった。漁師も観光的つり船業に転向する者が多く古い歴史を持ったほうちょうの漁村もついに観光の町となってしまった。小坪の地形を残す大崎と秘境住吉城跡が残されている。最後に残されたこの自然と史跡は大切に保護したいものである。

5 おわりに

この一文は、漁師町の小坪に生まれ70年も生きのびてきたわたしが、見てきたこと、聞いたことを書きとめたもので、漁労調査という資料にはもの足りないかも知れないが、漁具などについては塚田さんはじめ学識の深い調査員諸氏に補足してもらうことにする。

天候に支配される漁師の生活は不規則で、なかなかうまくその話を聞く時機が取れなかったり、調査員諸氏の仕事のあい間の調査だったり、なかなか思うようにならなかった。これも小生の不手ぎわと、おわびする。

小坪の古老の漁師さん、船大工さん、小坪小学校の資料室の撮影、等々関係者の協力や聞く会の宿になった草柳重太郎さんの家の方々に感謝いたします。

文責 石井清司

II 漁勞具調査内容

1 調査の状況とその結果

今回の漁労具調査は、現在使用されていないものを記録としてとどめることに主体を置いた。

調査にあたっては、最初、漁業の作業場のひとつとして小坪の浜を中心に取材をはじめたが、すでに現在使用されているものを除いて、従来使用されていた漁労具はほとんど見かけることができなかった。網で獲る、釣るなどの基本的な漁法は無論昔と変化はないが、たとえば網の材料が木綿又は麻からナイロンに変わり、タコツボがタコカゴにかわるような現象を示し、最もその母体となる舟は、木造からプラスチック造りに変化している。調査取材するなかで、ひとつの疑問として感じられたものに、これら近代的な漁具に変化しながらも「昔の手作り品の方が使いやすかった」という言葉をよく聞かされたことである。

先に述べたように、いわば過去の遺物である手作りの品は、作業場である浜周辺では90パーセント片付けられてしまっている。

幸いにも、もと小坪小学校々長であった石井清司（調査団長）によって、小坪小学校に資料室を設置して民具として集められたものと、小坪公民館には設立時において記念にと民具展示コーナーが設けられ、従来の漁具類が細々と展示されている。

石井清司団長の話しによれば「小坪小学校においては過去に相当量の漁具類を集めて置いてあったが、現在はかなり減ってしまった」とのことである。現に、我々が調査する数年前まで小坪小学校には「ぼうちょう」（見突漁）に使用する「ぼうちょう舟」が玄関に展示されていたが、腐蝕してしまったとのことで片付けられてしまっていた。

このような現状のなかで、前記2ヶ所に一応保存されているものを記録として残しておかなければならないと考え、写真及び実測を行った。さらに、小坪集落においては造船所が現在2ヶ所ある。そのひとつ有限会社小柴造船所社長小柴博氏の好意によって漁船（木造）造りに使用する道具類をも記録させて頂いた。

現在まで残されていた過去の漁具類からみると、大きくは網漁、釣漁、見突漁（ぼうちょう）^{※1)}に分類できる。これらの道具類をそれぞれⅠ、Ⅱ、Ⅲ類と分類し、記録（写真・実測）した。

展示してあるもののなかで名称及び使用方法が不明なものについては、写真及び実測をとった後、現役の漁労者の古老である草柳重太郎氏と一柳由蔵氏に聞き書きした。従って両者の方には大変ご迷惑をおかけしたが、漁法の具体的な話しを記録として残すことができた。

その結果、大方は前記の3種類の漁法に変化はないが、これらを細分化すると消滅してしまった漁法があることに気付いた。これらは特に海の変化（磯の変化）と、生産性を強く追求する現代漁業によって変化したものであると感じた。

現在の小坪地区の漁業は、定置網漁、エビを主体とする刺し網漁、アワビ、サザエ等を求める見突漁（ぼうちょう）と、一本釣漁（タイ、イサキ）等であるが、この中で、ぼうちょう、一本釣などは除々になくなりつつある。それにかわって遊漁業が盛んに行われつつある。

以上が調査及びその結果である。本報告書においては採取したものについて、前記した分類に分

割して漁労具の写真を中心に編集した。

他に船大工小柴博氏の話を聞きながら、船造具についてどのようなものがあるか併せて調査した。その道具類についても記録（写真）した。よってこの写真も別紙のごとくである。

注1 通常、民俗関係研究者は、見突漁と称するが、本来の名称はこれをこの付近では『ほうちょう』と呼ぶ。

これらの調査にあたっては直接現場の漁業の方々及び小坪小学校、小坪公民館などの方々にご迷惑をかけ、またお世話になったことを深くお詫と共に感謝申し上げます。

文責 塚田明治

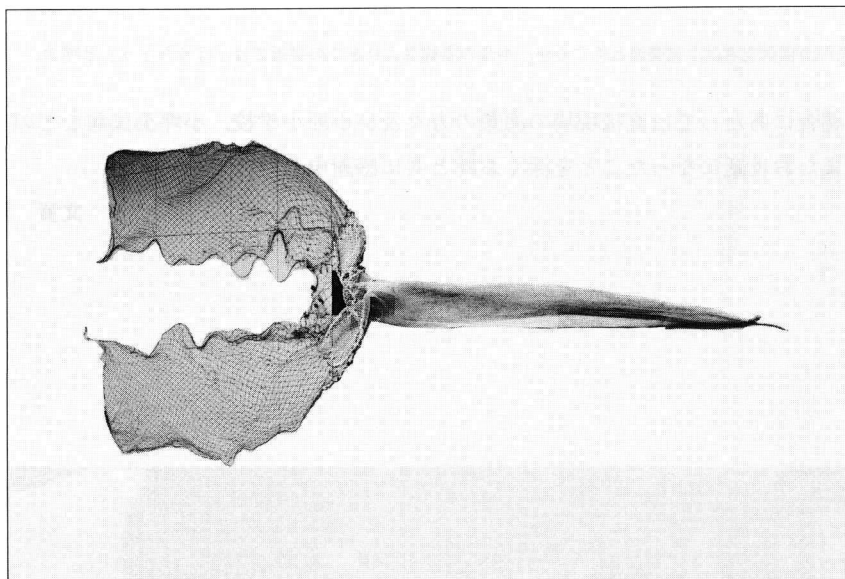


釣道具の調査風景

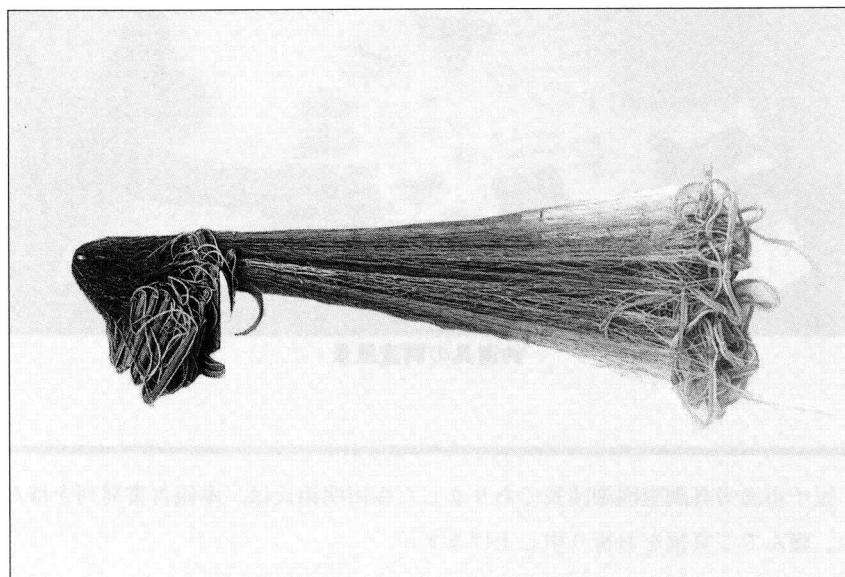
なお、逗子市漁労具調査団副団長でありました塚田明治氏は、本報告書発刊を待たず他界されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

2 漁労具の種類（図版）

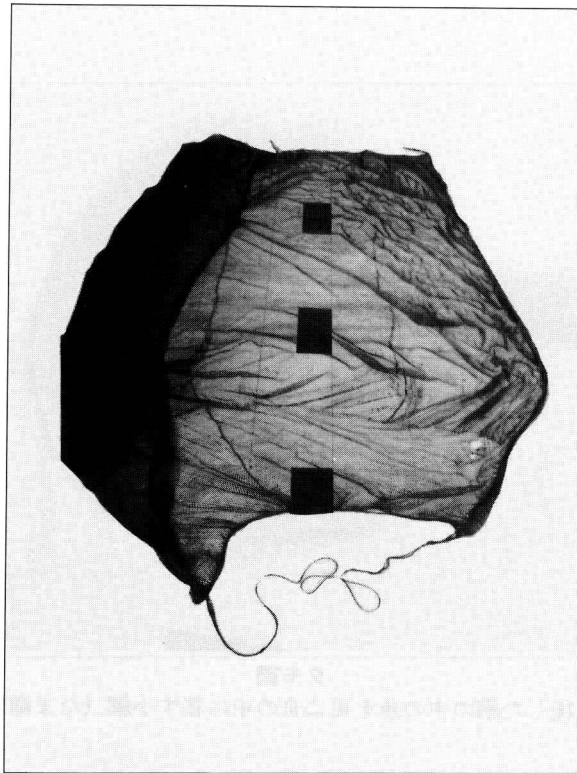
I 網 漁 具



シラス網
小型船引網

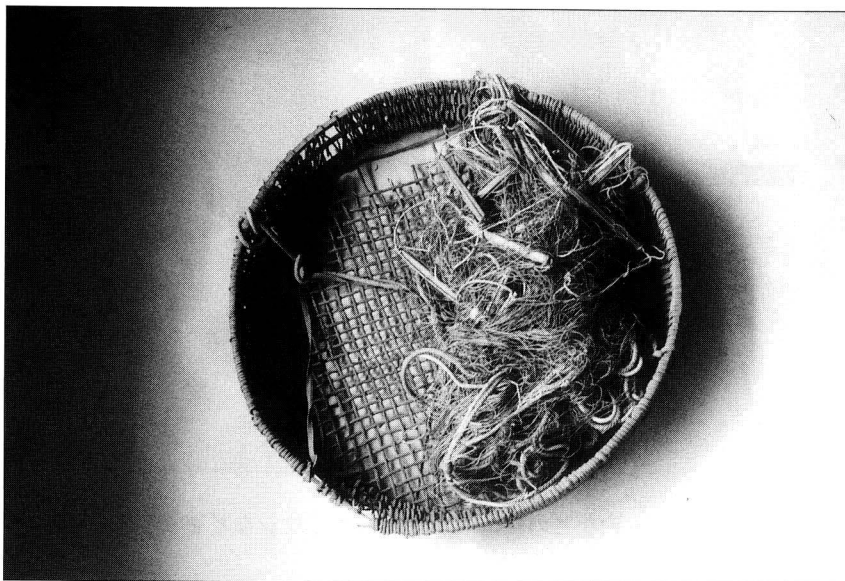


エビ網
サシ網でエビの他に岩礁にいる魚類などを獲る



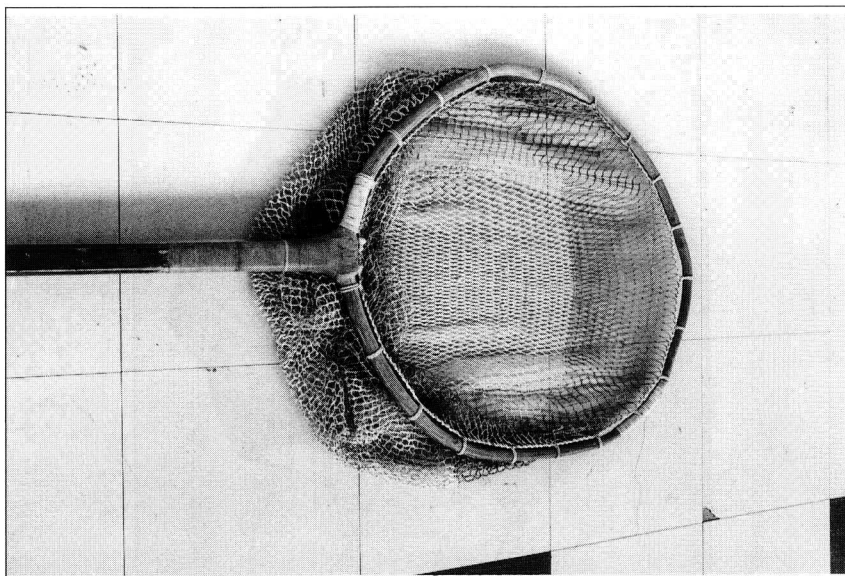
イワシ網

川魚漁で使用する四手網に類似するもので
イワシ類など、小形回遊魚を獲る



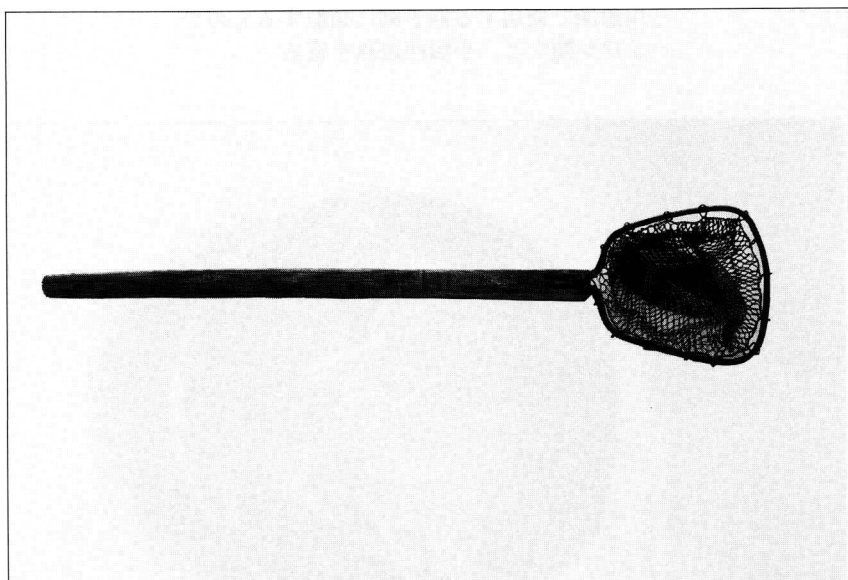
エビ網とダイワ（籐製）

網漁の付属具



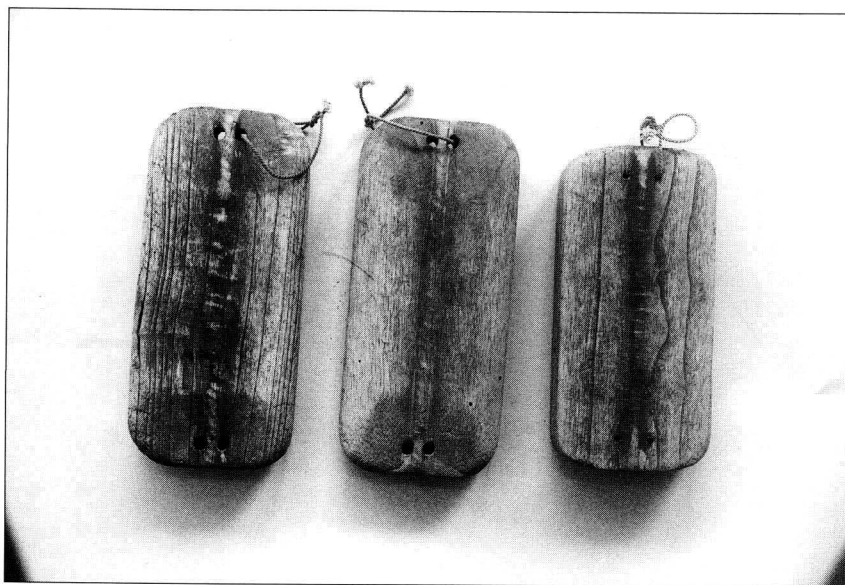
タモ網

収穫した網の中の魚を更に舟の中に移す小網（たま網）

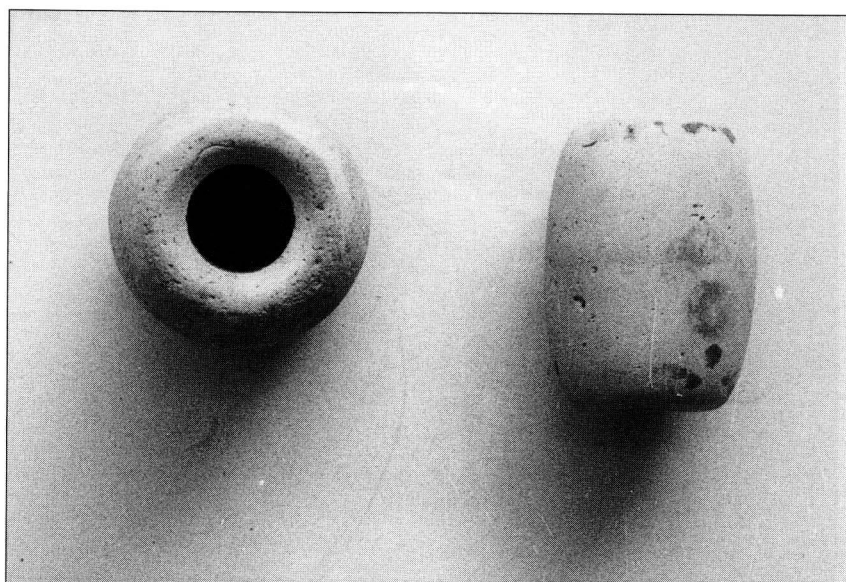


タモ網

カツオ一本釣などの時，コマセ用ヒコイワシなどをまく網



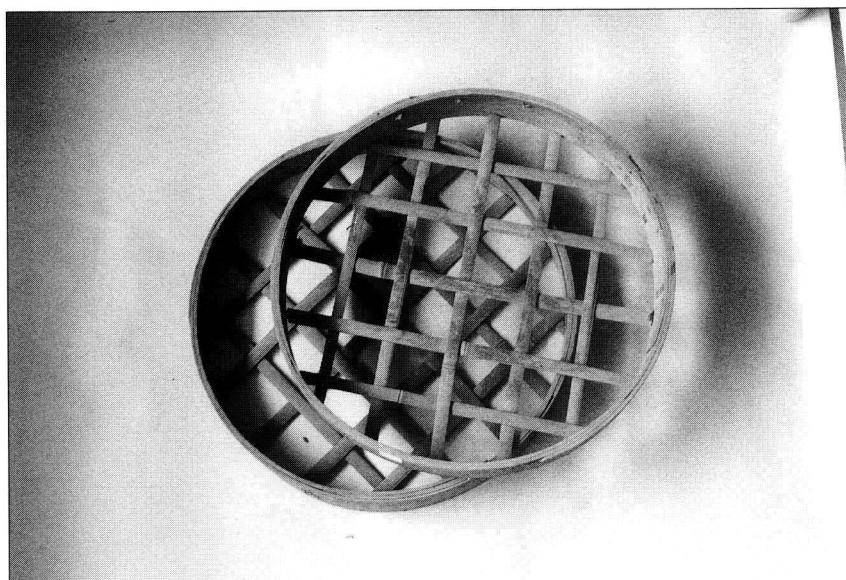
アバ
桐材で作った大型網用ウキ



イヤ
網用の陶製おもり



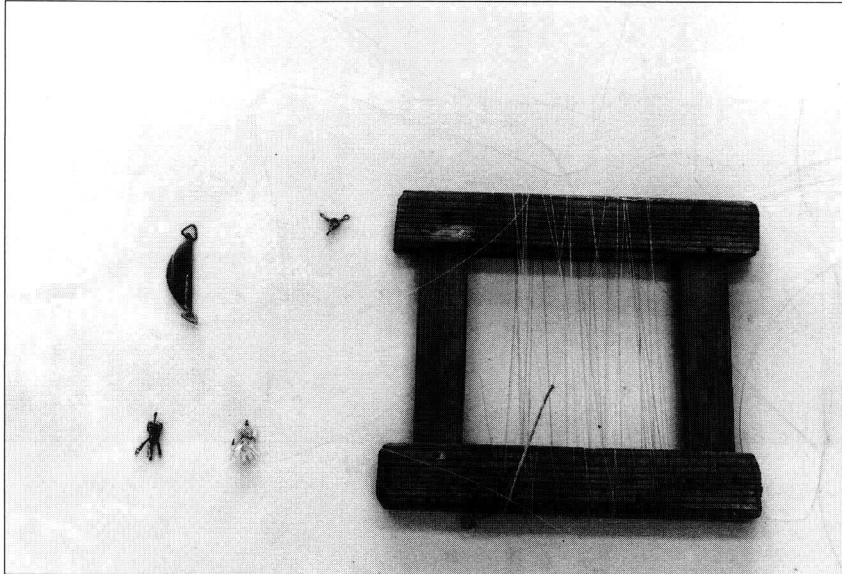
アンバリと袋
網を修理する竹針，大小13本で1組



ダイワ
曲物製（底は竹製），エビ網を漁場で使用しやすいように
たたんで載せて置くもの

II 釣 漁 具

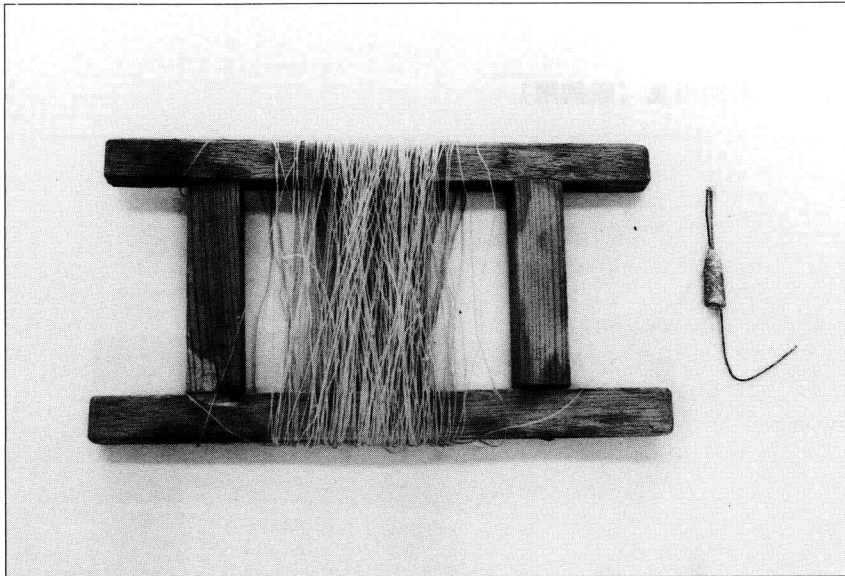
II-1 一本釣用具（底釣用）



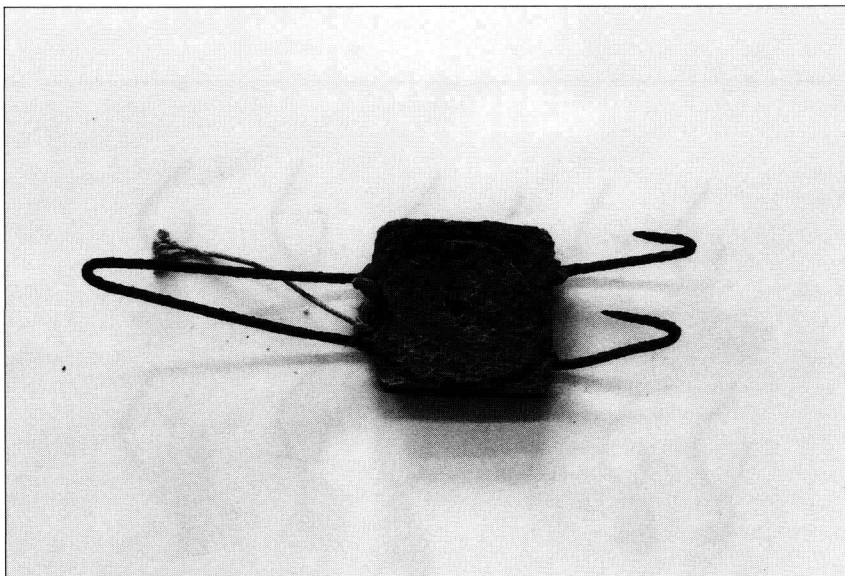
イサキ用しかけ
小形の赤糸を束ねてつけた疑似針を使用



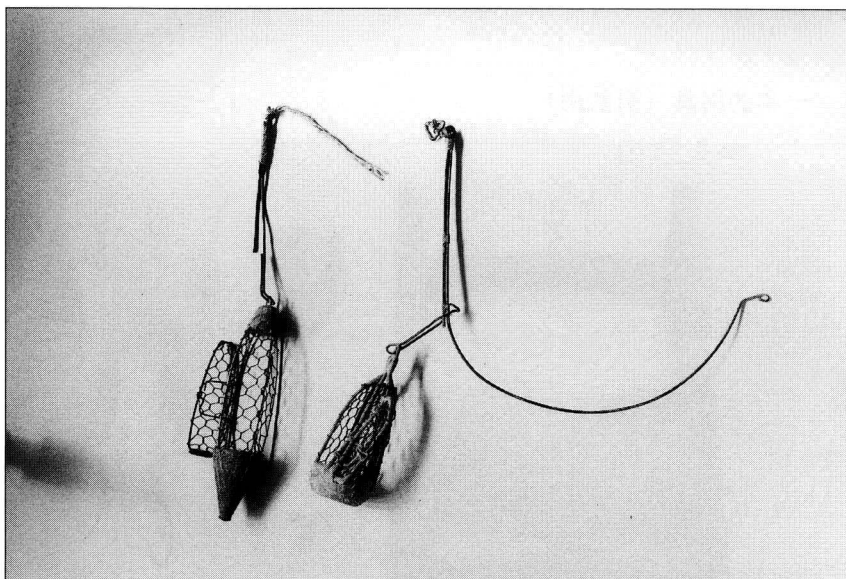
イサキ用釣針



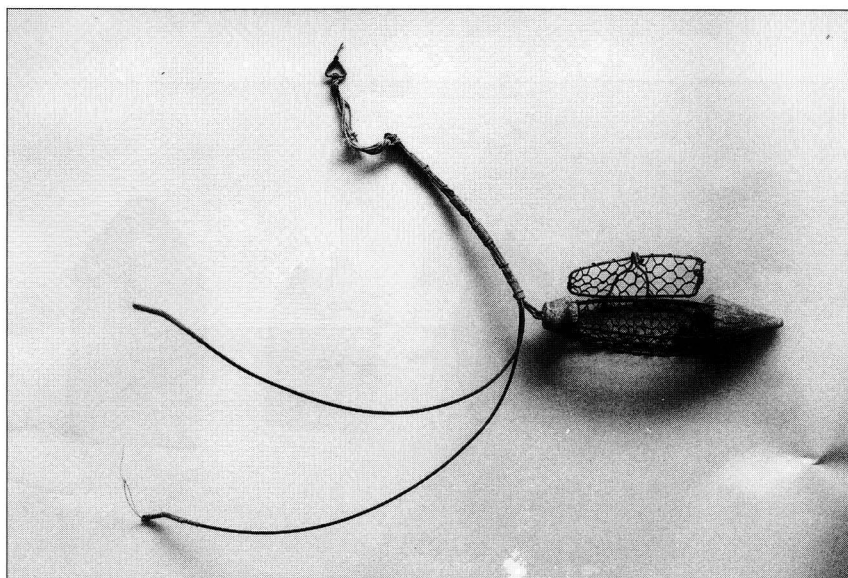
アジ釣用しかけ



タコテンヤしかけ

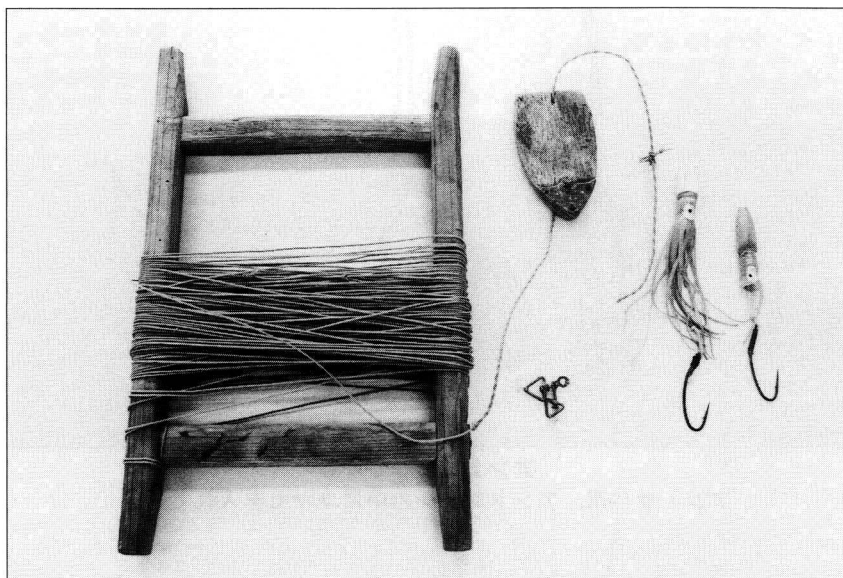


アンドンビシしかけ
アジ・サバ用，アンドンビシの中にコマセを入れて釣る



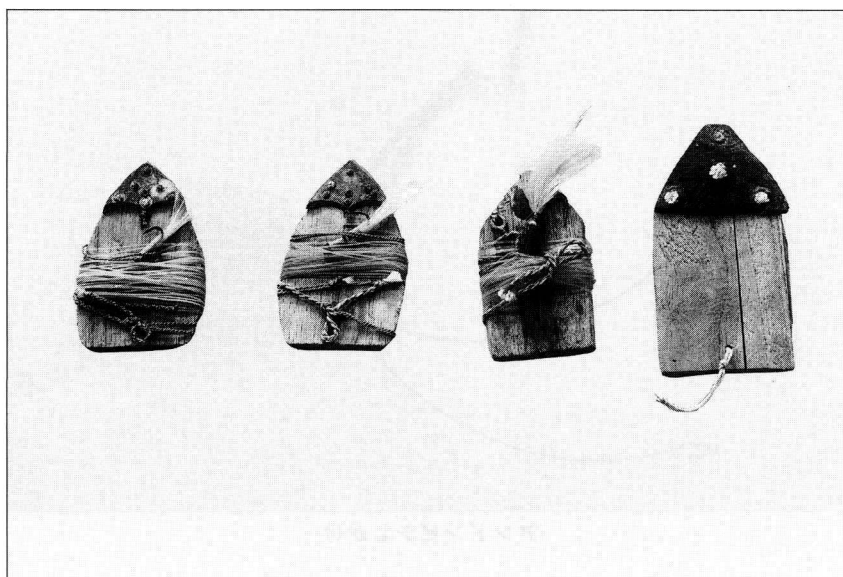
アンドンビシしかけ

II-2 一本釣用具（引釣用）



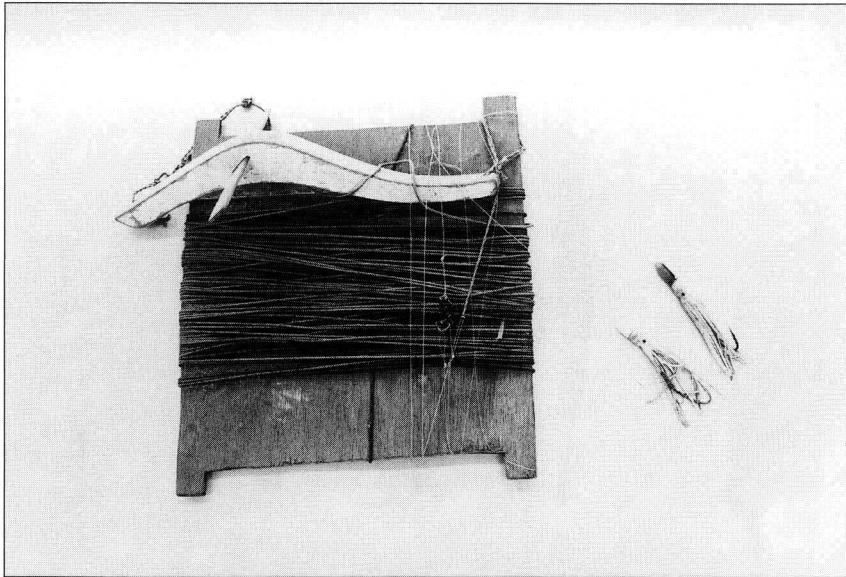
イナダ用しかけ

角製，プラスチック製の疑似針を使用し浮上浮きをつける



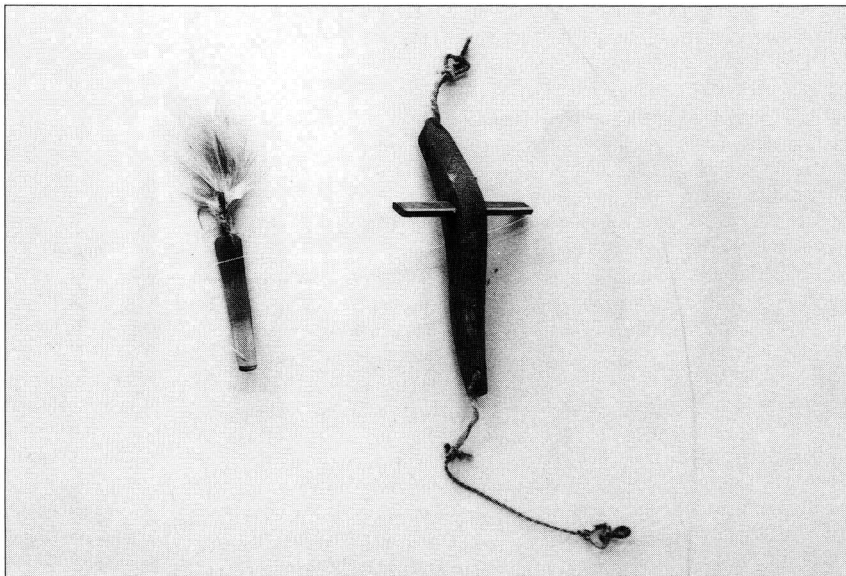
イタビッコ

イナダの引釣用の浮上浮き

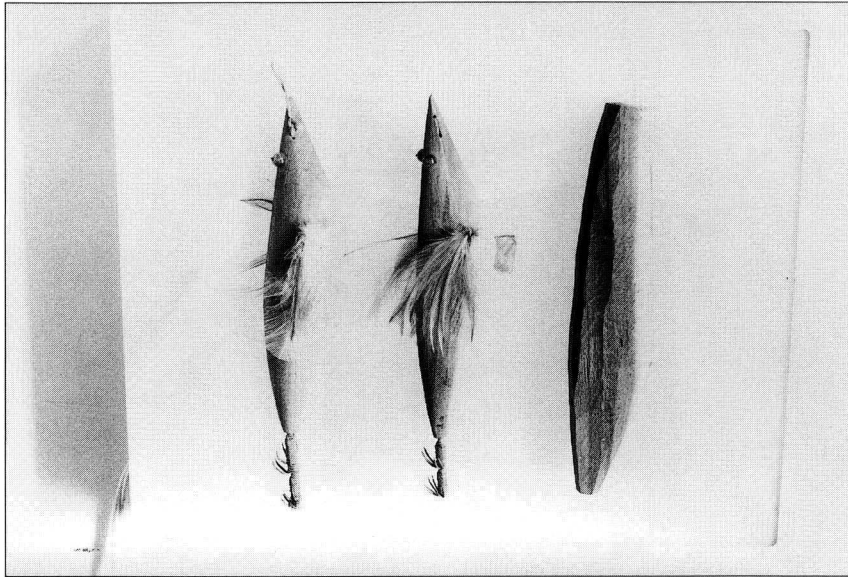


イナダ用しかけ

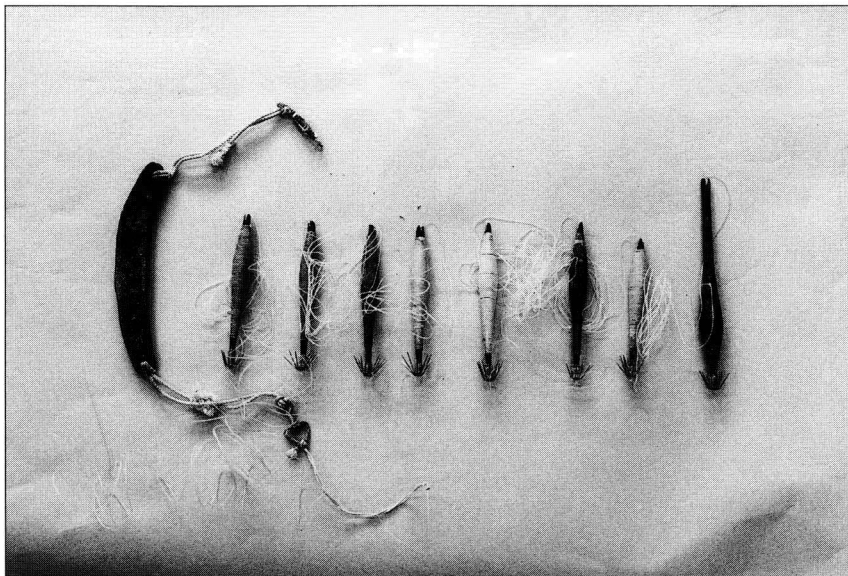
ハトと呼ばれる浮上浮き，羽根及びビニールをつけた疑似針



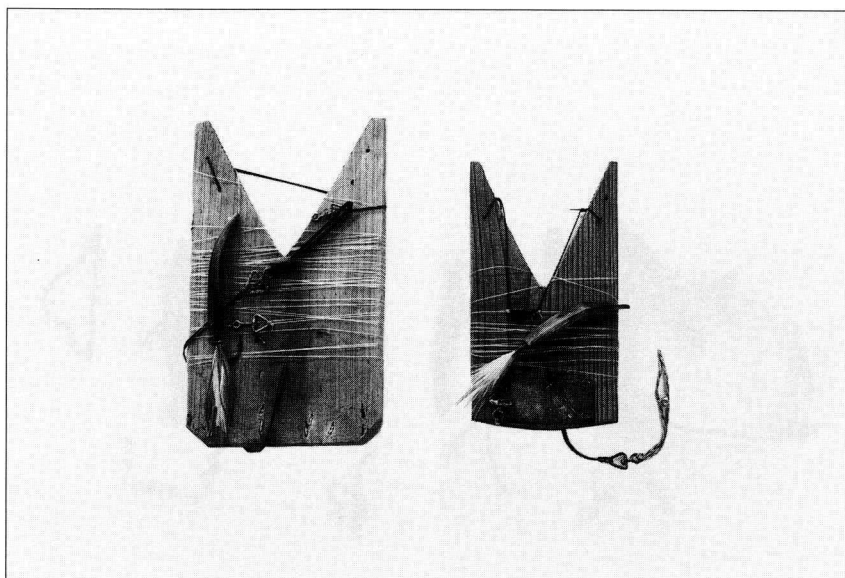
イナダ用ハトと角（左側）



イカヒキしかけ
アオリイカ専用の引釣用しかけ

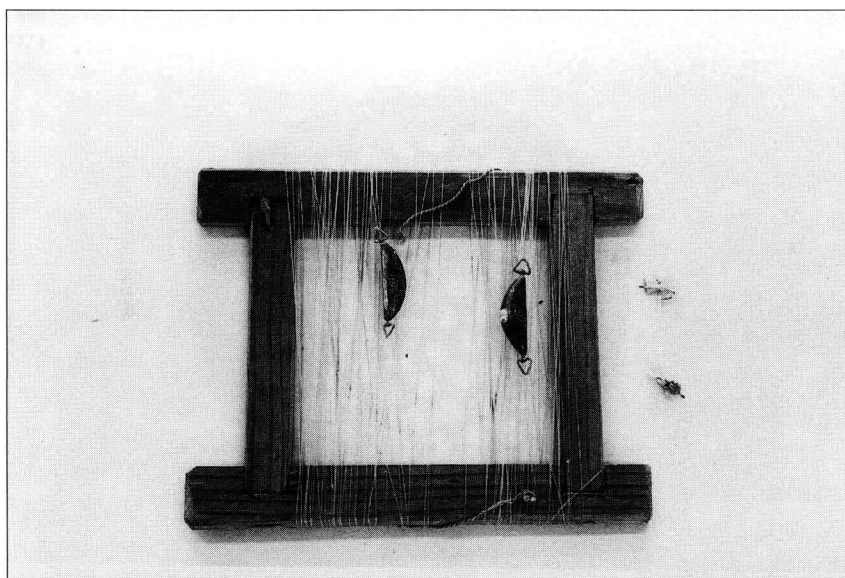


手釣用イカツノ



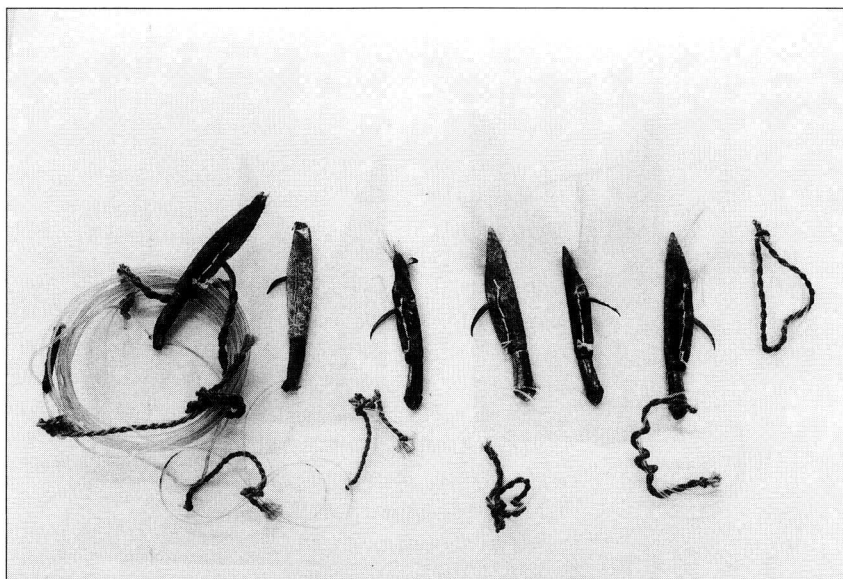
ヒラメ用しかけ

イナダ用しかけとほぼ同じだが、浮上浮きの形が異なる

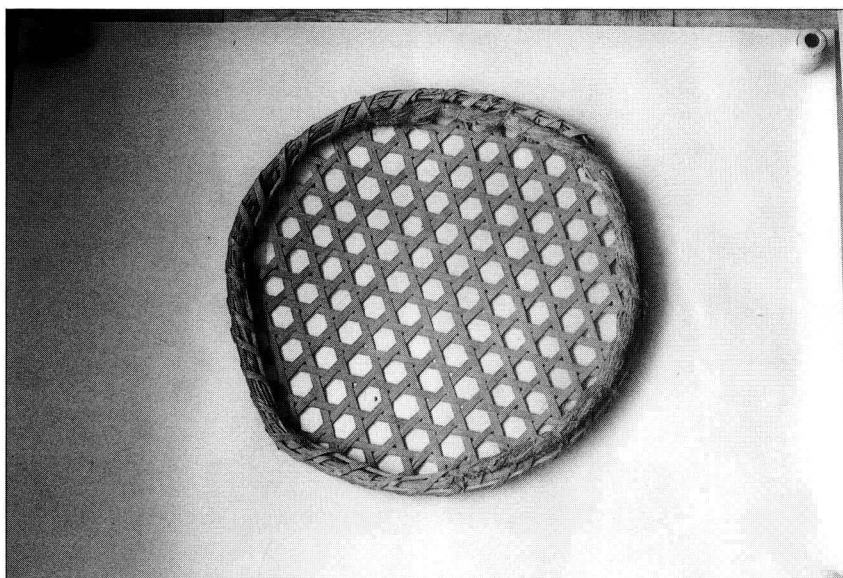


マダイ用しかけ

エサにはイキイワシ、イキエビを使う

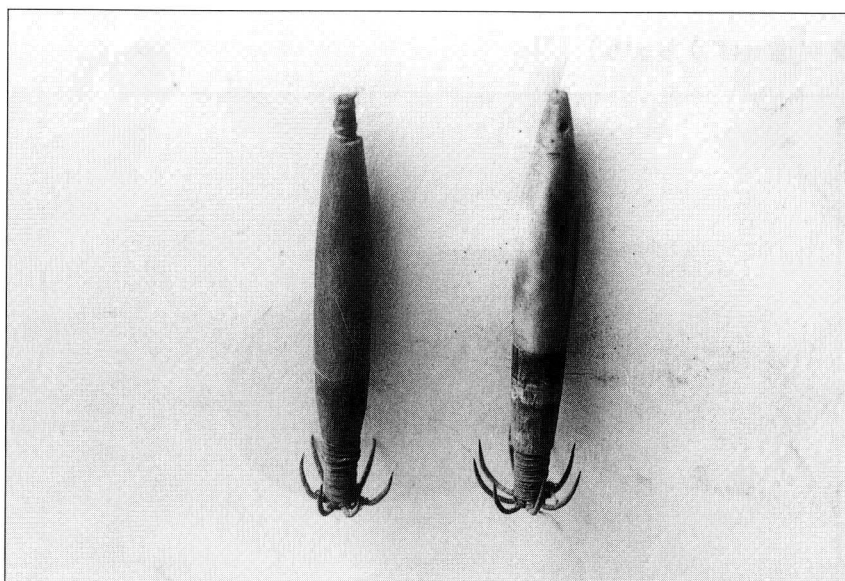


ソーダガツオ用しかけ

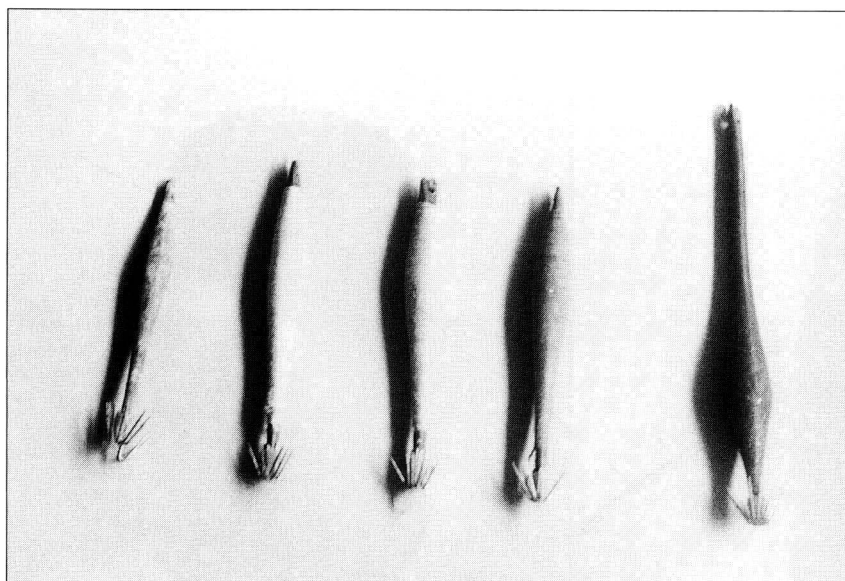


ナワバチ

竹製で半周だけシュロを巻いたもので、ハエナワ用の
釣糸を流しやすく束ねて載せるもの

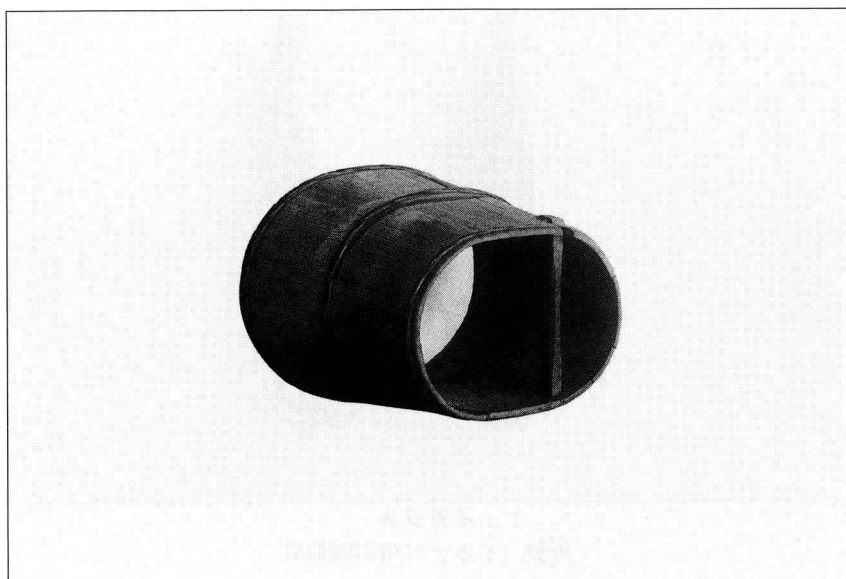


イカツノ
角製、イカナワ用の疑似針

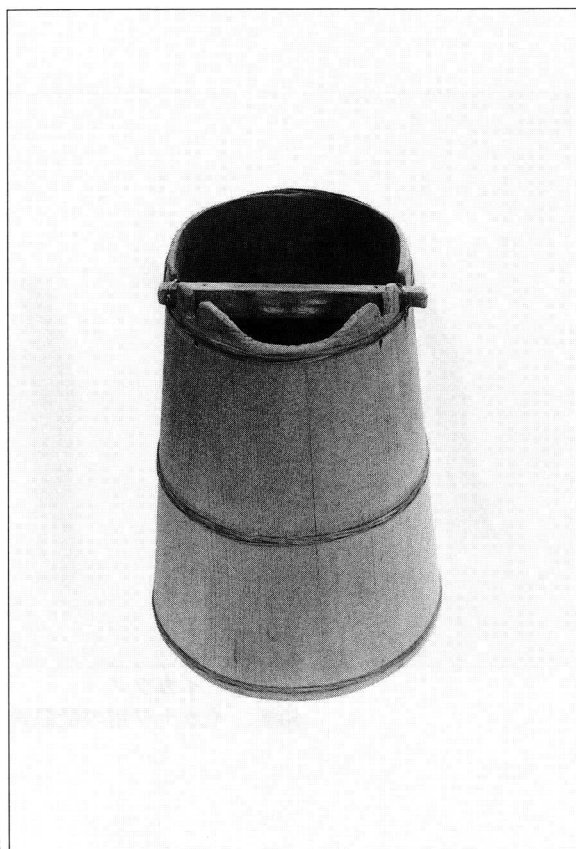


イカツノ
鉛製、イカナワ用の疑似針

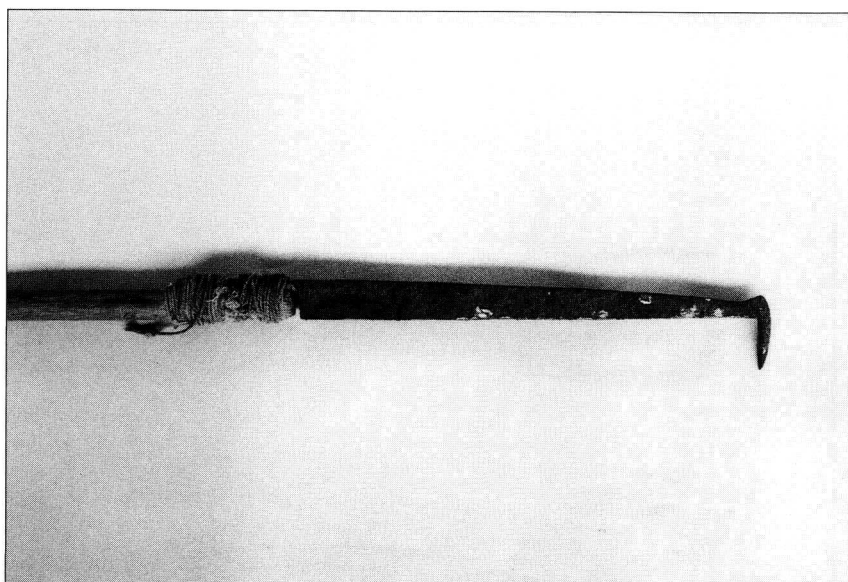
III 見突漁（ぼうちょう）



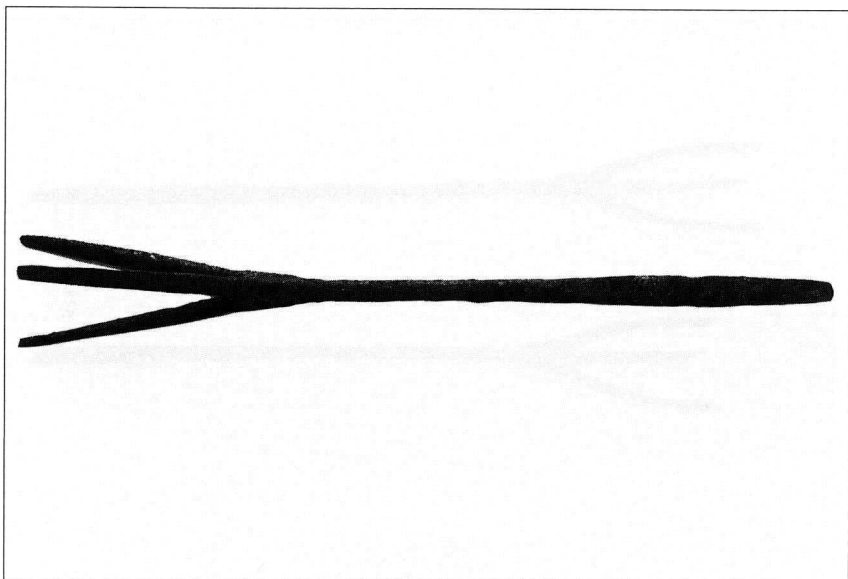
カガミ
小判型木桶製



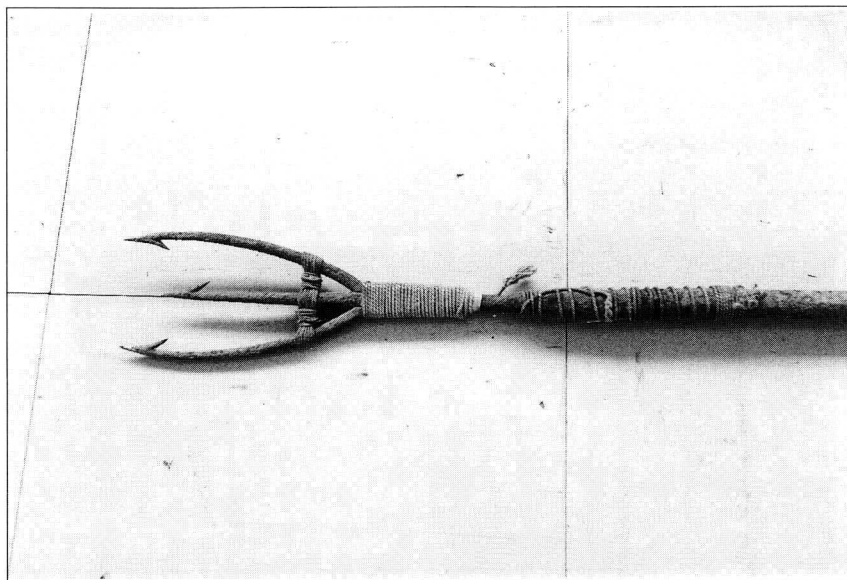
カガミ
円型木桶製



アワビオコシ（先端部）
大型，カシ柄付

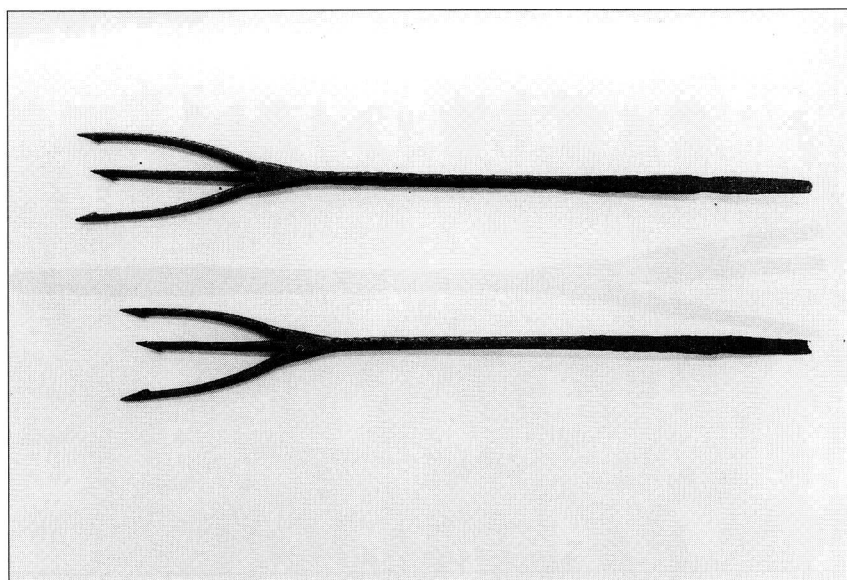


サザエフシ
さざえをはさむ鉈状の道具

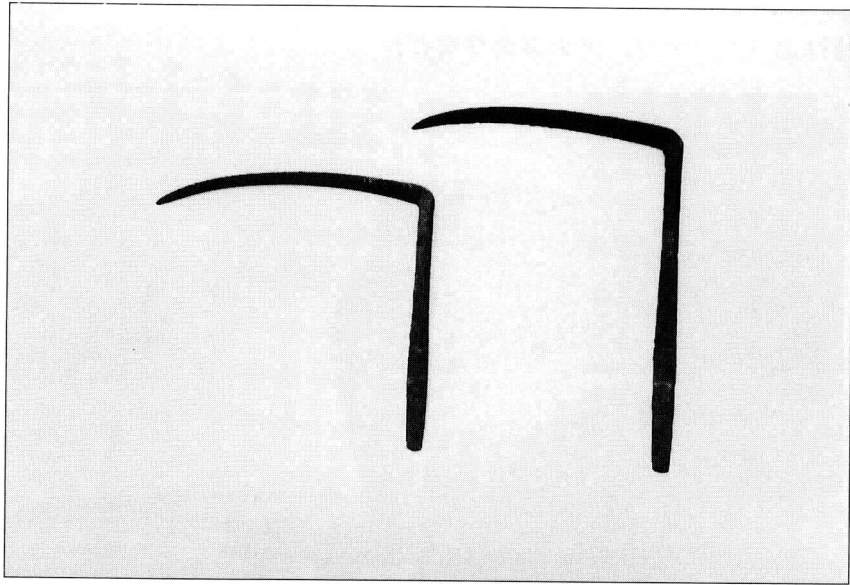


バラブシ

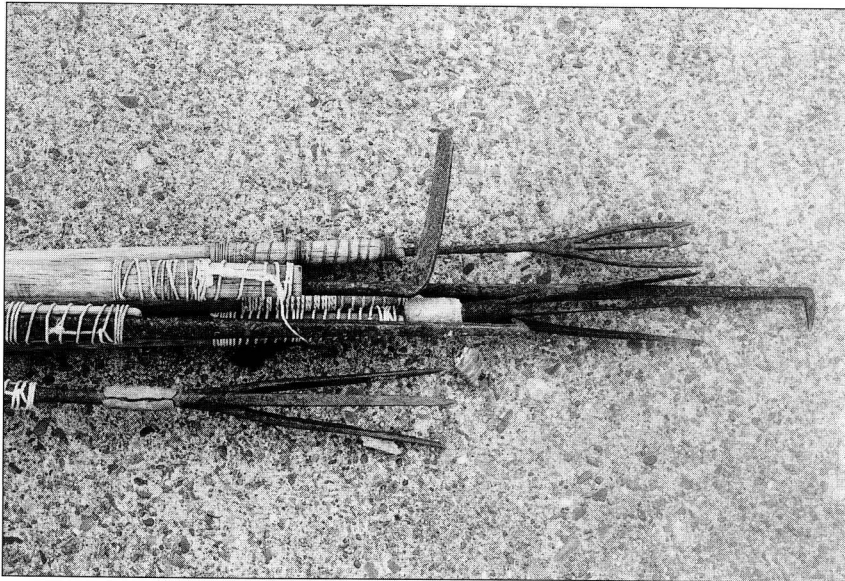
先端部を三本に分け、一緒に束ねて三本鉈とする



フシ
三本鉈

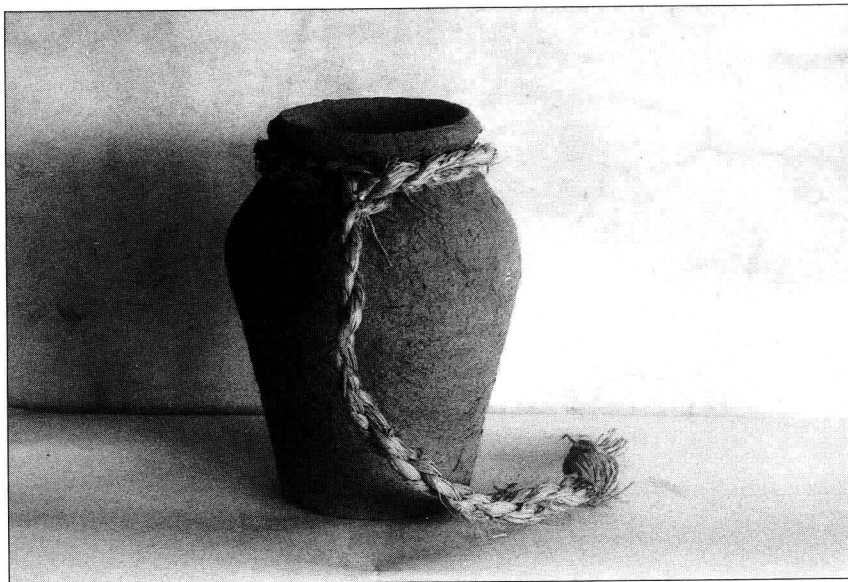


ワカメガマ
ワカメを切りとるカマ

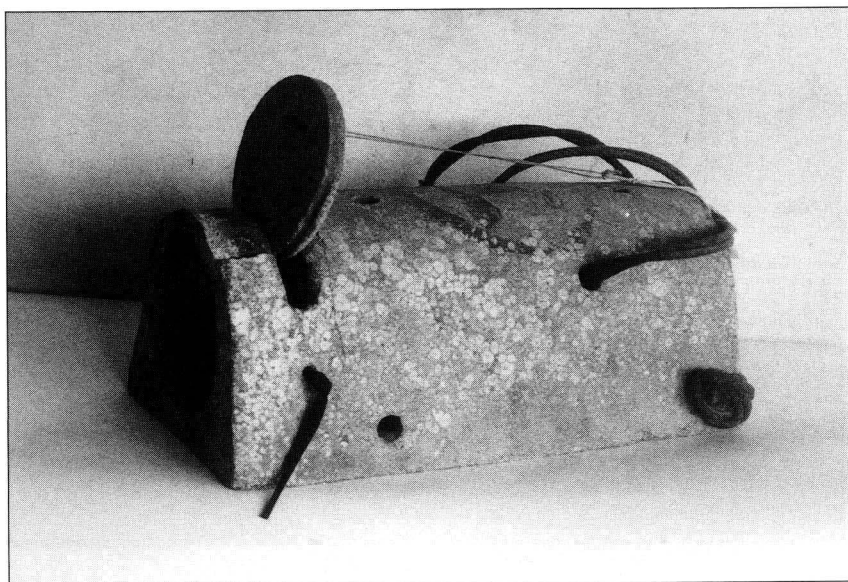


ボウチョウセツ道具

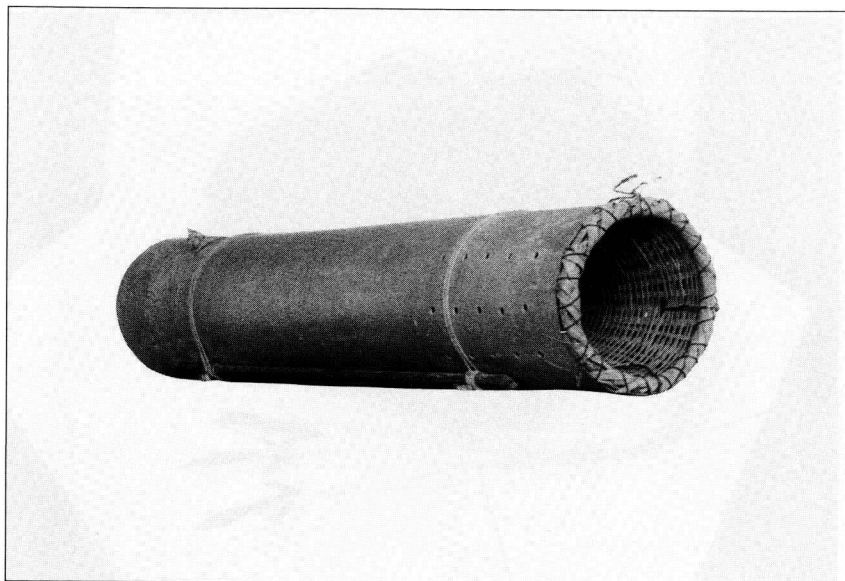
IV 特殊漁（タコナワ，アナゴナワなど）



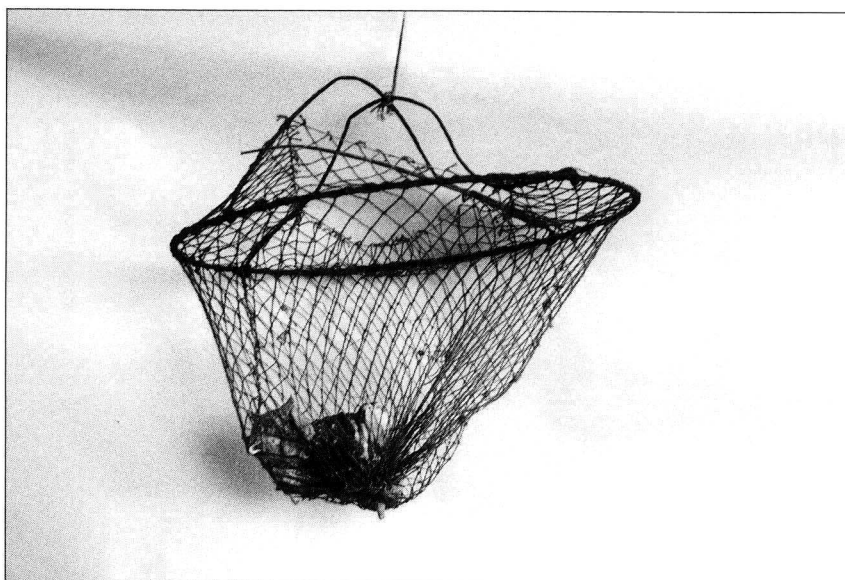
タコツボ
タコとり用の素焼の壺



タコツボ
コンクリート製，ネズミ取り式



アナゴ筒



バイカゴ

金網製，中にエサを入れてバイが入るのを待つ

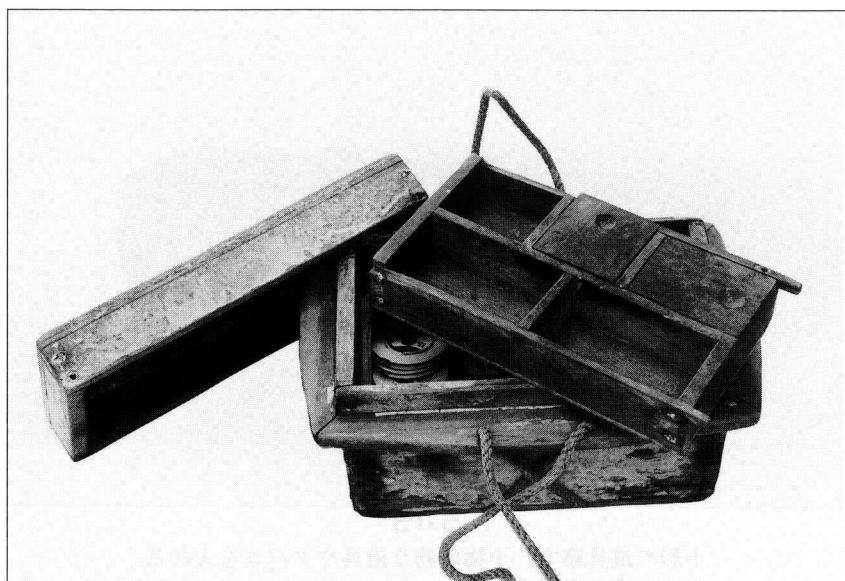


ツキンボー式
カジキ用，銚は三本組



ツキンボの銚

V その他（各漁に付属するもの）



スズ
道具箱，主として釣具を入れる

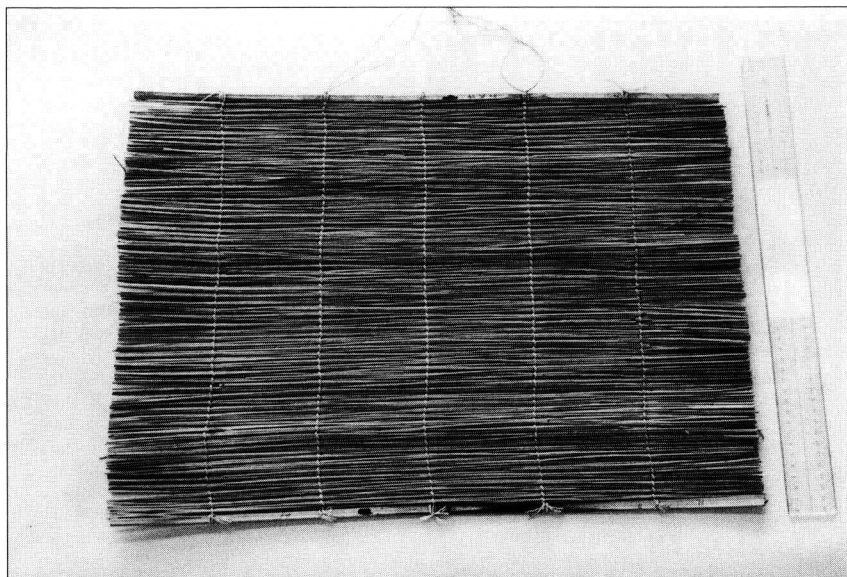


スズの中身
(釣具類他一式)

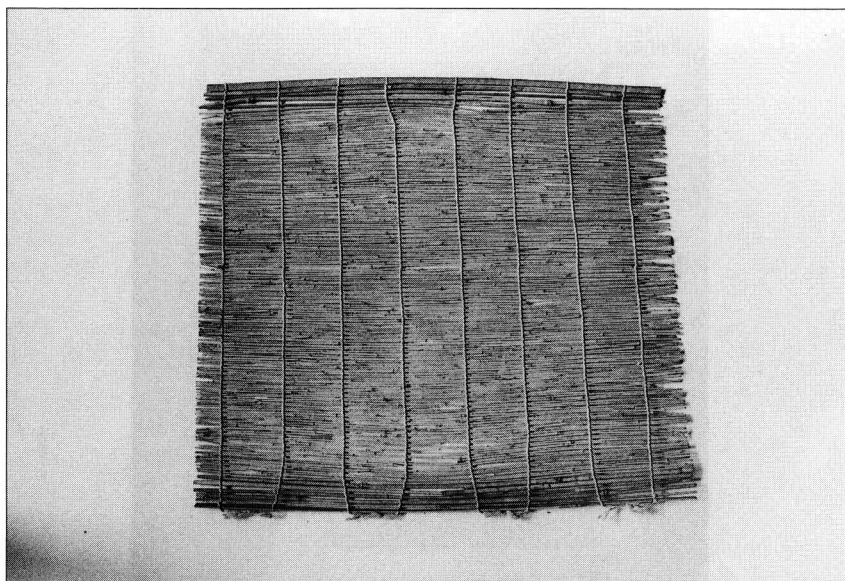


コバコ

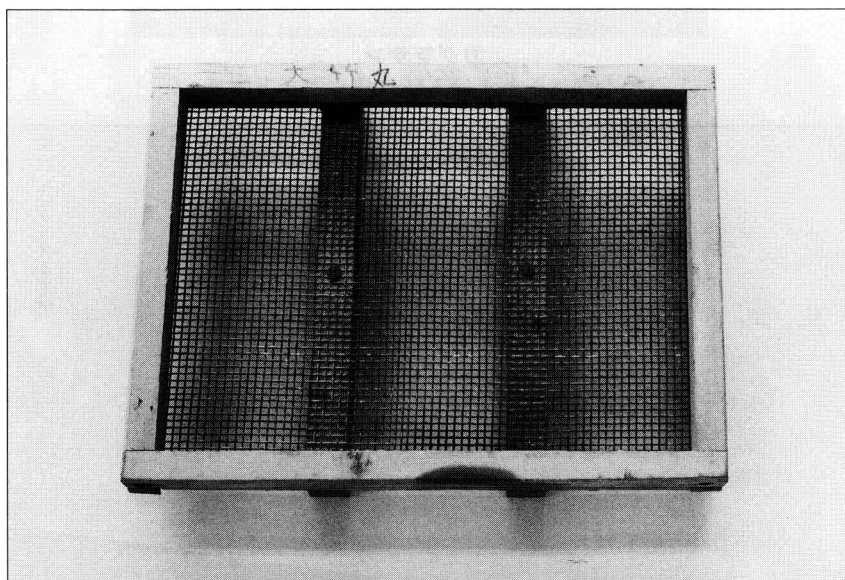
小形の道具箱で、小物の釣り道具やタバコを入れる
まくら箱ともいう



ノリ干し用スダレ



タタミイワシ用スダレ
タタミイワシを6枚干す

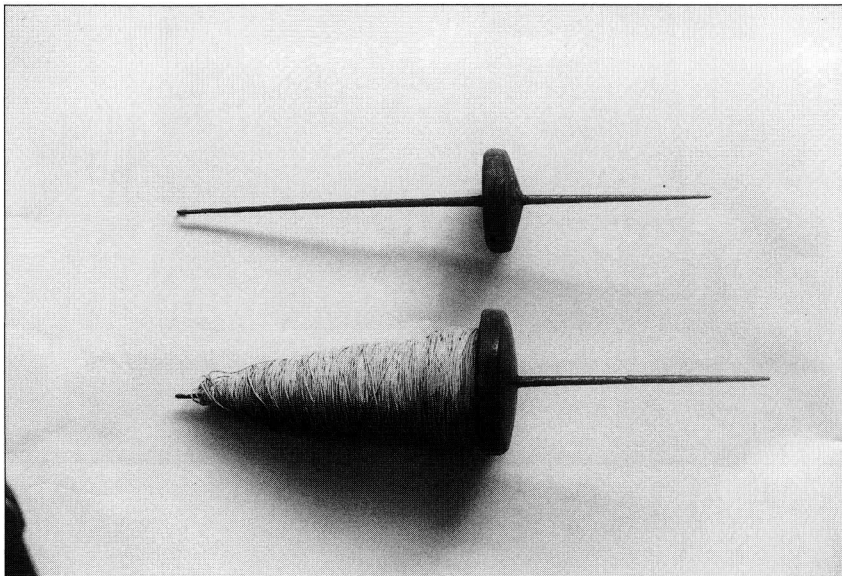


シラス干し用型箱



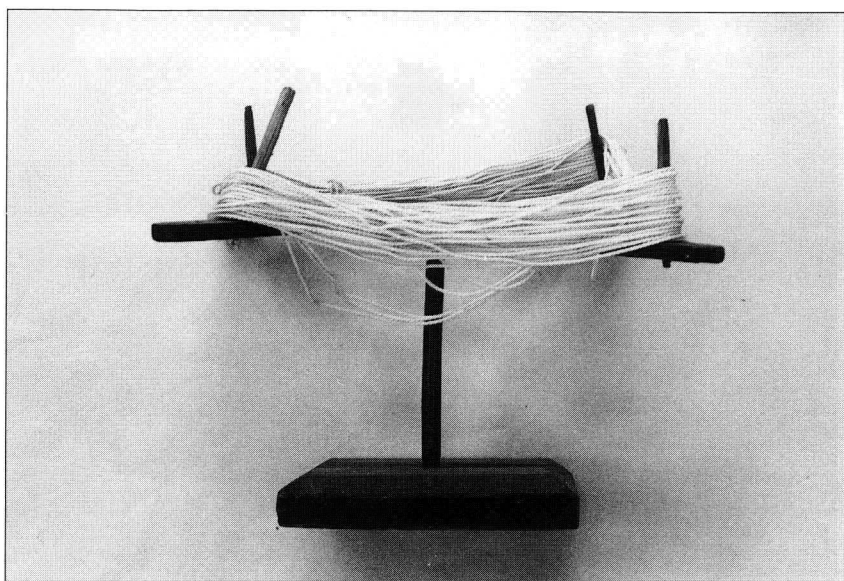
カグラサン

船を浜に引き上げる時に使う引き上げ具

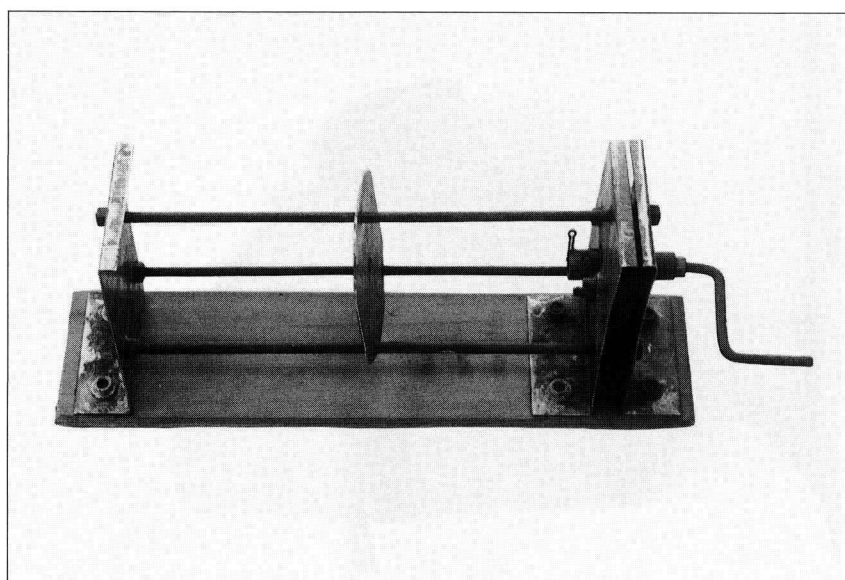


ツム

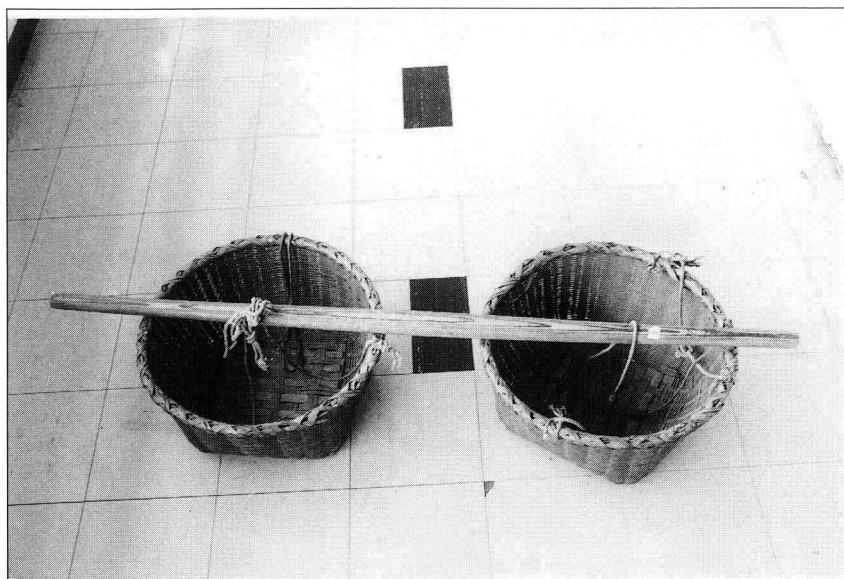
紡垂車, より糸を作る



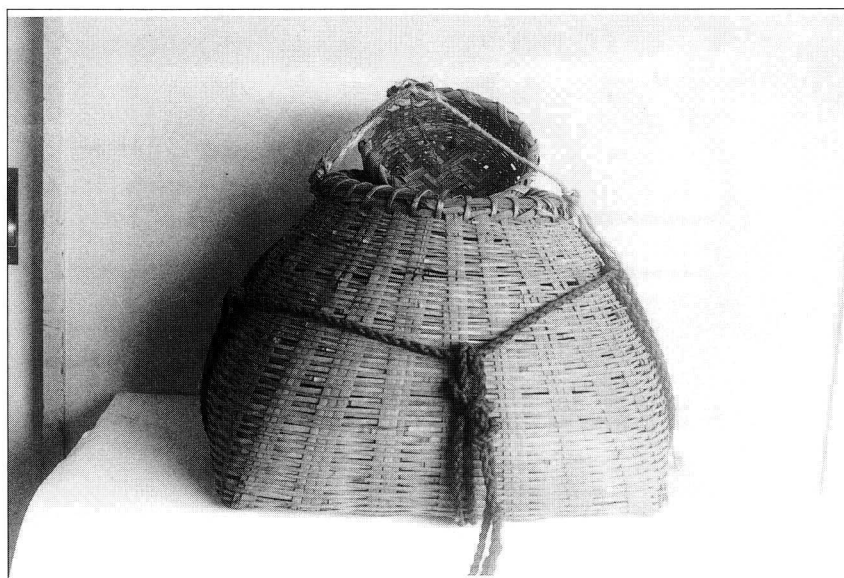
イトマキ



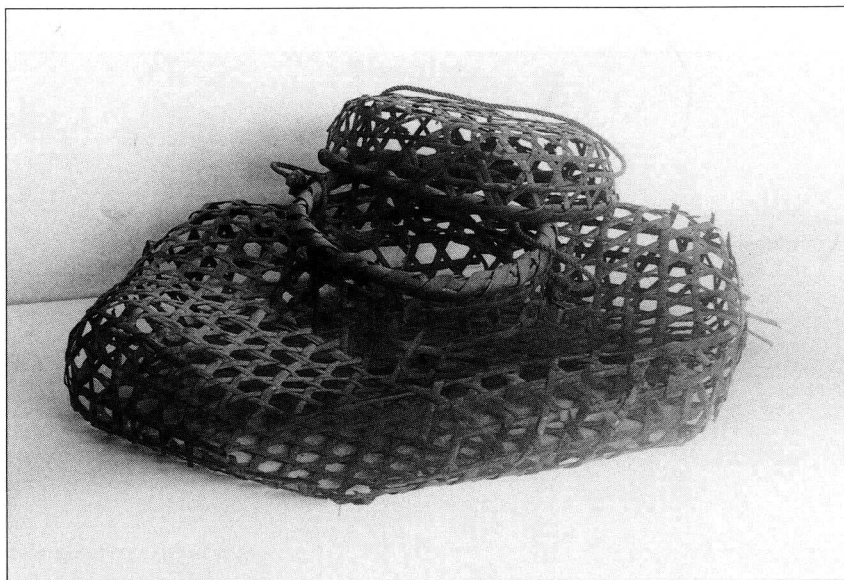
ツノマキ
イカツノ用



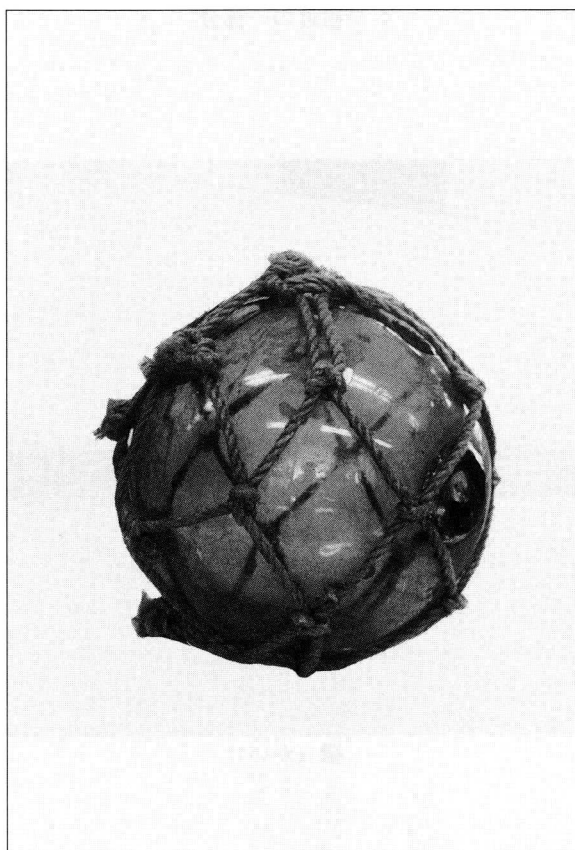
テンビン棒とカゴ
魚をはこぶ道具



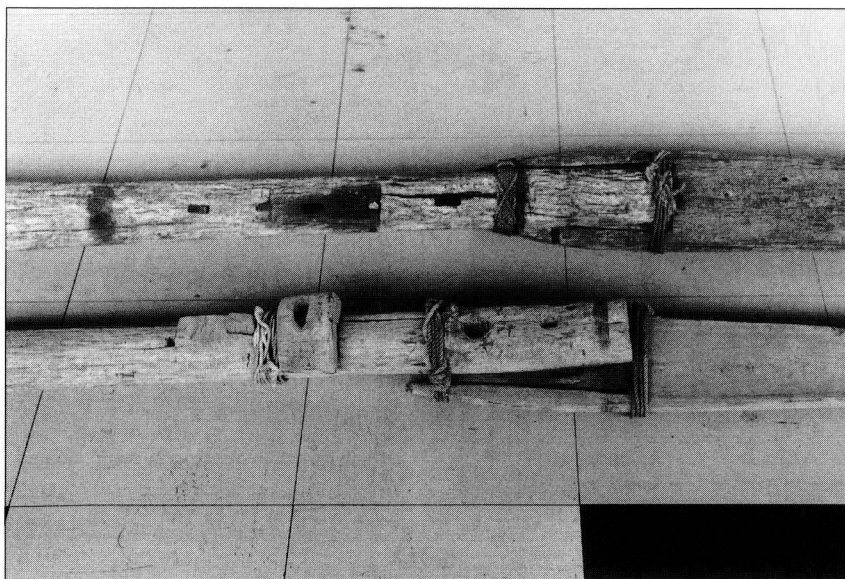
ビク
獲れた魚よりむしろエサを入れる



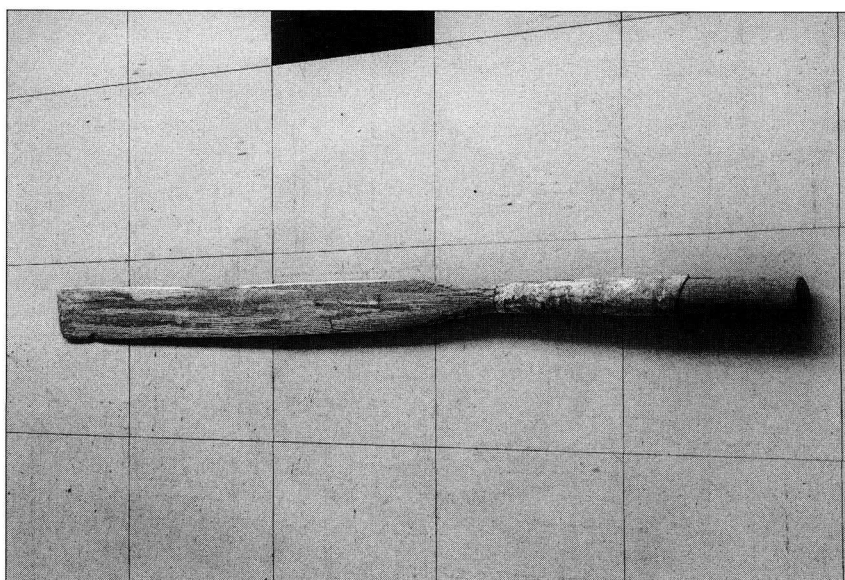
イケス
とれた魚エサを生かしておく



ガラス玉
定置網用，大型の網やハエナワの浮き



槽 (ろ)
ヘソ附近の一部分



櫂 (かい)



カジ



ナワバチ
ハエナワ用のオハチ